最大の尖頭器と石槍をめぐって

鹿　又　喜　隆

1　は　じ　め　に

後期旧石器時代後半になると，古本州島では石器製作に両面調整技術が導入され，両面加工の槍先形尖頭器が出現する。石槍とも言われるこの器種は，旧石器時代終末から縄文時代初頭にかけて大型化のピークを向かえる（白石 2001）。そして，縄文時代を通じて広く認められ，弥生時代になると，石製の短剣が現れる。日本列島において，この尖頭器が最も大型化したのは神子柴・長者久保石器群の時代であると，日本の考古学界では共通認識がある。同石器群の資料から優美な大型の尖頭器をあげようとすれば，幾つかの候補が思い浮かぶ。一方で，「日本列島で最大の尖頭器はどの資料か？」との問いに対して即座に回答できるかは，甚だ自信がない。その理由のひとつは，尖頭器がその製作工程の初期には大きく，徐々にリダクションを受けながら完成に向かっていくサイズ変化をもつからである。つまり，未完成のもの，初期工程のものほど大型であり，どの段階で完成品（完璧な槍先形尖頭器）と認定できるのかに確固たるクライテリアがないためであろう。しかしながら，石器製作地以外の場所で，完形の尖頭器が出土すれば，それは多くの場合，完成品またはそのブランク（母型）であると仮定することができる。そして，大型品が重用された当時の価値基準や経済観念を鑑みても，最大の尖頭器がどの資料か，最大級の尖頭器の大きさがどの程度なのかを明らかにすることには，考古学的な意義がある。そして，芸術家が美しく大きな作品を作ることは，単なる経済的行為ではなく，人間本来の高度に美的で情緒的な欲求に起因することを踏まえれば，本論の試みは日本先史文化の象徴を検討することに値する。そして，本論で扱う精巧で長大な石槍は，おそらく製作された当時，そして現在も人々を魅了し続けているに違いない。そのことを示すがごとく，大型尖頭器の多くは指定文化財に登録され，博物館に展示・保管されている。そして，「最大の石槍はどれか？」という質問は，博物館展示の見学者のような一般の方々から寄せられる。しかし，不思議なことに，尖頭器や石槍

に関する多くの専門書がありながら，最大の尖頭器・石槍を明示した研究は今のところ見られない。

ところで，尖頭器の価値は，そのサイズや形態，そして，その石材の特徴が加味されて，評価される。すなわち，石材自体の稀少性や石質（色調，反射度，透明度，光沢性，硬度）など，様々な要素を含めて，尖頭器の価値を評定する必要がある。さらに，尖頭器を製作しやすい石材もあれば，難しい石材もあるため，当時の価値基準が尖頭器の各種属性に反映されている。

さて，大型尖頭器とその出土遺跡を評価する場合，幾つかの視座をあげることができる。例えば，安斎正人（2001）が示した景観考古学や象徴考古学の観点があるが，本論では最初に「過剰デザイン」の視点に着目する（安斎 2010）。つまり，実用のサイズを超えて大型化した道具には，自己主張・自己顕示（アイデンティティー）など，何らかの象徴性や威信的性格が含まれる。こうした道具は，異文化集団同士が接触する関係下で生じる傾向にある。もう一つの視座は交換・交易の観点であり，大型尖頭器は特別な道具として流通の中で特殊な役割を果たしていたと考えられる。このような交換・交易といった人間行動を考慮すれば，資料の時代性の検討は不可欠であり，各資料の所属時期についての情報を付け加える必要がある。また，石器製作技術という観点では，その背景に熟練者やスペシャリストの存在が投影され，さらにそうした人物の社会的地位や，その存在の稀少性にも着目しなければならない。

本論では，大型の尖頭器をめぐる様々な議論を踏まえた上で，日本列島の最大の尖頭器はどの資料であるかを資料集成によって明らかにしたい。その際に，各石材の稀少性や原石サイズ，尖頭器の交換・交易・運搬，製作の難易度などを並行して考慮できるように，石材（産地）ごとに最大の尖頭器について検討したい。結果的に，石材原産地を中心とした分布圏に基づく地域性が反映され，石材流通のネットワークを俯瞰することになる。

2　威信財・象徴的器物としての大型尖頭器

「威信財」は，弥生時代から古墳時代への社会システムの変換プロセスを物語る際に，近年多用される用語である。威信財のシステムに関しては，石村智（2008）によって研究史やその概念が整理されている。民族社会の威信財システムの事例から，いわゆる首

長制社会にその存在が想定されることからも，弥生時代・古墳時代の研究にその概念が適用されることは肯首される。こうした前提・想定があることを念頭に置く一方，旧石器時代から縄文時代への移行期には，大型の尖頭器や石斧が存在し，威信財または象徴的器物と言及されるものが確かに存在する。谷口康浩（2006）は「財とそのトランスファー」という概念を引用し，財としての神子柴型石斧の特徴をまとめた。そして，旧石器から縄文への移行期にそれらが顕在化したのは，旧石器的なバンド社会から縄文的な部族社会への変化のプロセスの一部であったことを，社会進化論の観点から推察している。こうした財としての石斧に関しては豊富な民族事例がその実態を物語ってくれる（マリノフスキ 1967，佐原 1994，Stout 2002）。また，縄文時代に入ってからも，威信財が存在し，儀器化されていたことが指摘される（大工原 2008・2012）。一方，安斎正人（前掲）は，晩氷期の気候変動期に，北海道から南下した渡来集団（細石刃石器群）と在地集団（尖頭器石器群）が出会い，こうした異文化集団が接触する緊張関係の下で，大型の尖頭器（過剰デザインの石槍）が生まれたと考えている。すなわち，大型尖頭器が発生・展開した旧石器時代終末の社会システムは，必ずしも首長制社会と呼べないかもしれないが，異文化集団同士が接触したという社会的摩擦・衝突があったことは事実であろう。また，大型尖頭器を威信財あるいは象徴的器物と呼ぶべきかを議論することは一旦保留するが，こうした社会システムを考察することは，その機能を超えて大型化した道具の検討なしには行えない。すなわち，尖頭器は後期旧石器時代からの長い歴史をもち，当該期にのみ大型化したため，こうした社会的変化を最も如実に反映する資料と言える。

本論では，大型尖頭器が発生した社会的状況とその展開を，日本列島の大型尖頭器の集成に基づいて検討する。当該期には，尖頭器石器群や北方系細石刃石器群において，黒曜石の遠距離運搬に例示されるような物資と人々の広域移動があった（木村 1997）。国家の発展に伴う専業的な遠距離交易とは異なるものの，現象としては広域の物資の往来があり，その中に大型尖頭器が組み込まれている。また，一部の大型尖頭器は，縄文時代の早期・前期の土坑墓に副葬される。こうした特殊品が埋納される事例は階層化社会の具現化と考えられるため，そこに首長制社会を想定することができる。

ところで，モノのライフヒストリーは，交換を含む社会的相互作用の連続性の中で評価することが可能であり，commodities（自由な移動と等価交換が可能な日用品）と singularities（完全に交換不可能な単一物）の 2 極の間のどこかに位置づけられる。そ

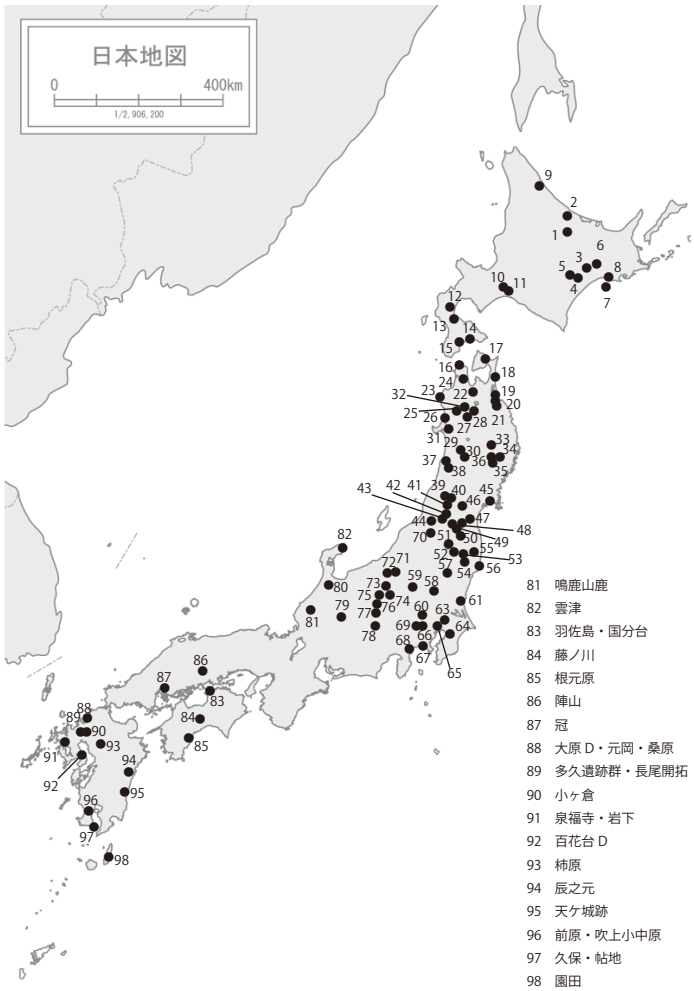
して，儀礼に使用されるモノは特有のコントロールされたライフヒストリーをたどり，通文化的には後者に極に近づく（松本 2013）。したがって，大型の尖頭器がシンボリックな機能を持つのであれば，日常使用される道具とは全く異なるライフヒストリーを辿ったはずである。

さて，物資の流通･交換･交易を測る際には，物資の数量や，物流の拠点･ネットワークの存在，原産地・製作地と出土地の空間的関係，異なる物資の交換・共伴の様相などを検討する必要がある。それによって，大型尖頭器の生産と流通が，専業的な集団・個人によって行われていたのか，あるいは各集団で臨機的に製作され，威信財として長期的に管理されていたのか等を考察できる。そして，本論では，大型尖頭器が成立し，長期間利用されることを可能にした当該期の社会システムについて，具体的に叙述することを試みたい。

3　サイズと年代の予察

藤野次史（2004）による尖頭器のサイズ分類によれば，「小型は長さ 4 cm 前後より短いもの，中型は長さ 5～9 cm 程度，大型は長さ 10 cm 前後より長いものを目安とする。（中略）大型は 11～13 cm に中心をもつグループと 15 cm 以上に中心をもつグループのそれぞれ二者がある」とされる。例えば，大型尖頭器の代表格である神子柴・長者久保石器群（本州東半の青森県から神奈川県までの遺跡）を参照すると（鹿又 2008），完形の尖頭器 180 点の平均値は，長さ 99.1 mm，幅 35.1 mm，厚さ 12.2 mm，重さ 51.6 g である。サイズのバラツキが大きいため，平均値に大きな意味はないかもしないが，中央値では，長さ 89.1 mm，幅 35 mm，厚さ 11 mm である。長さと幅の散布図を示すと（付図 1），中央値周辺に密集し，長さ 150 mm 未満は連続的に見られるが，それより大きいものは散漫となり（n.=27，15%），長さ 180 mm 以上になると散発的に見られるに過ぎない（n.=11，6.1%）。したがって，本州東半の神子柴・長者久保石器群の中でも，180 mm 以上のサイズの尖頭器は，規格外の大きさと言うことができる。

こうした検討を経て，本論では尖頭器の未成品を含めて国内の 180 mm を超える大型尖頭器を悉皆的に集成した（註 1）。さらに，地域性を考慮して，その地域で大型尖頭器と言えそうな 150 mm 以上の資料を必要に応じて抽出した。その結果，長さ 180 mm 以上の尖頭器が 250 点，長さ 200 mm 以上が 162 点あることが分かった（図 1，付表 1）。



1　白滝遺跡群
2　沙留
3　斗満
4 ワラン沢
5　落合
6　羽帯
7　釧路沖合
8　東釧路貝塚・達古武
9　タチカラウシナイ
枝幸町・
10　カリンバ 2
11　美々・美沢遺跡群
12　美利河 1・釜谷 10
13　山崎 5
14　中野 B・富岡町
15　大平・札苅 8
16　中の平
17　沢ノ黒
18　戸鎖・富ノ沢（3）
19　東道ノ上（3）
20　畑内
21　寺ノ沢
22　三内丸山・
新町野・石江
23　津山
24　相野山・牛潟（1）
25　綴子
26　上ノ山 II・
樋向 I・大野地
27　池内
28　はりま館
29 心像小学校
30　岩瀬
31　中山
32　七ツ館
33　安倍館
34　綾織新田 II
35　鵜ノ木、下嵐江
36　新平
37　八森
38　吹浦
39　上野 A
40　坂ノ上・大森 A
41　朝日村
42　押出・日向洞窟
43　一ノ坂
44　墓窪
45　中沢
46　野川
47　下別当・高野
48　菖蒲ヶ入
49 下ノ平 D・弓手原
50　上ノ平
51　戸ノ口
52　関下
53　重石平
54　空釜 B
55　梨木平
56 入ノ内
57　高原山
58　上林
59　黒井峯
60　渡場
61　梨ノ子木久保
62　大六天
63　南羽鳥遺跡群
64　六通神社南
65　武蔵関
66　前田耕地
67　遠藤山崎・栗原中丸
・向原
68　羽根尾貝塚
69　多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.426
70　上ノ平 C
71　大刈野
72　本ノ木・別当 A・
向田・横倉
73　山吹堂
74　八風山IVB・下茂内
75　男女倉 B・
唐沢ヘイゴロゴーロ
76　榎海戸
77　神子柴
78　芝原
79　高山市上野町・西洞・大林
80　天神
81　鳴鹿山鹿
82　雲津
83　羽佐島・国分台
84　藤ノ川
85　根元原
86　陣山
87　冠
88　大原 D・元岡・桑原
89　多久遺跡群・長尾開拓
90　小ヶ倉
91　泉福寺・岩下
92　百花台 D
93　柿原
94　辰之元
95　天ケ城跡
96　前原・吹上小中原
97　久保・帖地
98　園田

図 1　大型尖頭器出土遺跡の位置

本州北半の晩氷期の遺跡出土資料を見ても，150 mm 以上の資料は減多に出土するものではないが，全国的に通時的にみれば，大型尖頭器はかなりの数が確認されている。

さて，全国の大型尖頭器を集成すると，その多くが神子柴・長者久保石器群とその直後の縄文時代草創期前半に属するが，縄文時代前期を中心に早期から中期に含まれるものが一定数存在する。また，単独出土や表採資料のため，厳密な所属時期が断定できないものが多くある。さらに，原産地遺跡の資料は複数時期の石器分布が重複している可能性があり，細かな時期変遷を追うことが困難である。したがって，以下では，最初に

通時的な尖頭器サイズの検討を行い，その後に地域性や時代性を考慮した検討を行う。

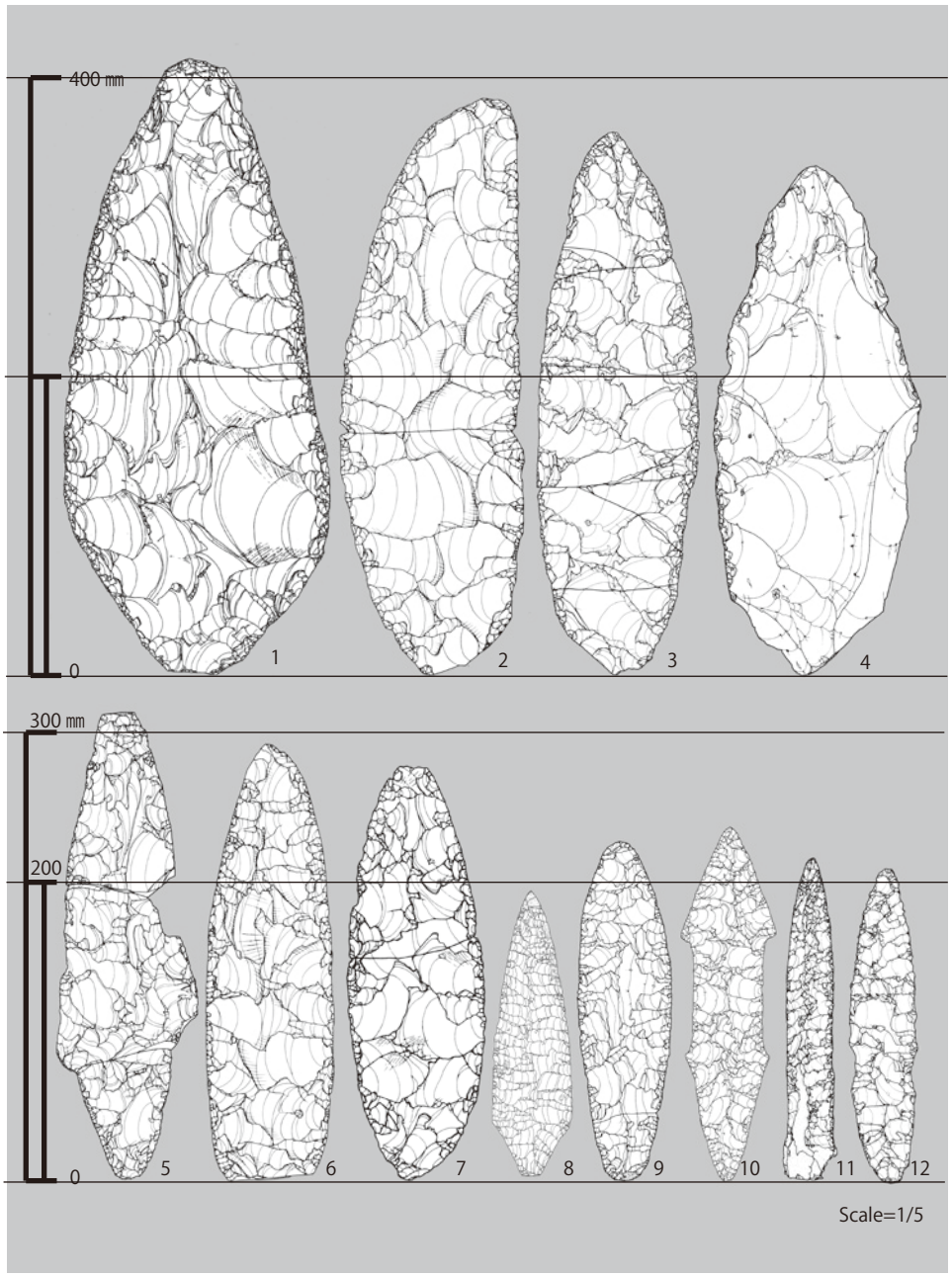
さて，旧石器時代から縄文時代の日本列島において，未成品を含めて全国最大のものは，北海道美利河 1 遺跡の頁岩製の尖頭器の未成品（長さ 447 mm，幅 186 mm）である（図 3-1）（北海道埋文 1985）（註 2）。次は，宮崎県辰之元遺跡の安山岩製尖頭器（長さ 420 mm，幅 91 mm）であり（図 5-1），完形かつ完成品と思われるが，圭頭形と呼ばれる特異な形状を呈する（横田 1987）。3 番目が北海道沙留遺跡の黒曜石製尖頭器（長さ 414 mm，幅 126 mm）であり（図 2-1）（寺崎 1996），尖頭器というよりも両面調整の石核とも言えそうである。長さ 400 mm を超えるのは，全国でこの 3 点に限られる。また，400～300 mm の大型品の多くは，北海道白滝遺跡群のような原産地遺跡から出土しており，製作過程で放棄されたものと推測できる。形態的にも，いわゆる柳葉形・木葉形の典型ではない。こうした検討を経ると，最大の木葉形・柳葉形尖頭器の完成品は，美利河 1 遺跡のメノウ質の硬質頁岩製品（長さ 331 mm，幅 75 mm，全体では 11 番目の大きさ）と言える（図 3-2）。この資料は折損しているが，遺跡内で製作された形跡がなく，搬入品と考えられる。大きさの上位 20 傑は，2 例以外は全て北海道内に所在する。

4　石材と地域性

(1)　北海道の黒曜石

日本列島の最大の黒曜石産地は，北海道の白滝赤石山であろう。露頭に近い幌加沢遺跡遠間地点（遠間栄治コレクション）では，長さ 180 mm 以上の尖頭器が 29 点（うち 200 mm 以上が 24 点）あるが，すべてが破損品や失敗品である（筑波大学遠間資料研究グループ編 1990）。その中で最大のものは，長さ 384 mm，幅 123 mm に達する（図 2-2）。一方，この原産地に程近い場所でも，珪質頁岩製の有舌尖頭器（長さ 145 mm，幅 28 mm）が存在する点は注目される。なお，幌加沢遠間の 100 m^2 に満たない発掘区の約 50 万点もの出土石器の中で，180 mm を超える尖頭器は 1 点のみであり（木村 2012），白滝の露頭近くでさえも大型品が容易に発見される状況ではないことが分かる。

その麓の白滝遺跡群には，多くの石器製作址が残されており，大型の尖頭器が多数出土している（北海道埋文 2001・2002・2004a・2004b・2006・2007a・2007b・2008・2015，白滝村 1982）。180 mm 以上が 62 点（200 mm 以上のものは 45 点）出土し，完形・



1 沙留、2・6 幌加沢遠間、3 上白滝 8、4 旧白滝 5、5 白滝 18、
7 斗満、8 釧路沖、9 東釧路、10 カリンバ 2、11 美々 8、
12 三内丸山

図 2　東北日本における黒曜石製大型尖頭器

未成品の最大のものは上白滝 8 遺跡のもので長さ 362 mm である（図 2-3）。有舌尖頭器では，欠損品であるが白滝 18 遺跡で長さ 313 mm のものがあり，一際大きい（図 2-5）。大型品は，未成品か失敗品・欠損品ばかりであり，完成・完形品で最大と言えそうなのは，旧白滝 3 遺跡のものであり，長さ 175 mm，幅 84 mm とかなり小さくなる。したがって，白滝遺跡群では，200 mm を超える大型品を製作していたが，遺跡には製作途上で失敗，折損したものが残され，完形の完成品は遺跡外へ搬出されたと考えられる。旧白滝 8 遺跡では，236 点で構成される接合資料の中に長さ 257 mm の尖頭器が含まれ，長さ 290 mm，幅 140 mm，厚さ 105 mm の原石に復元される。尖頭器の製作工程を示す良好な資料である。また，180 mm を超えるサイズではないが，黒曜石製以外の尖頭器が白滝遺跡群の各遺跡（註 3）から出土しており，尖頭器の流通や製作・消費，ライフヒストリーを考える上でその把握は不可欠である。他石材製の有舌尖頭器は，黒曜石製のものと同型・相似形であり，全く同じ技術で作成されたと考えられるため，同一の製作者（個人・集団）による作品とみられる。

一方で，原産地から離れていながらも大型品が出土した遺跡が存在する。興部町沙留遺跡では長さ 414 mm，幅 126 mm が最大であり（図 2-1）（寺崎前掲），日本列島の黒曜石製尖頭器でも最大のものである。この尖頭器は先端が尖らず基部に自然面を残しているため，未成品かもしれないが，この形で搬出されているため，完成品かそのブランクであったと評価できる。また，陸別町斗満遺跡では 3 分の 2 程度が残存する欠損品で長さ 313 mm（完形ならば約 500 mm と推定），幅 155 mm，完形品で長さ 250 mm，幅 130 mm のものがある（図 2-7）（明石 1996，山原 1996a）。同遺跡では，比較的大きな頁岩製の尖頭器（長さ 155 mm，幅 45 mm）も出土している（図 3-6）。デポの存在は否定されているが，複数の原石を素材としたものが一括出土した可能性がある点で注目すべきである。ここでも，黒曜石と頁岩には同様な製作技術が行使されている。帯広市落合遺跡でも細身の完成品（長さ 185 mm，幅 38.5 mm）がみられる（帯広市教委 1992）。

釧路沖合の海底から引き揚げられた黒曜石製の有舌尖頭器は，長さ 191 mm，幅 53 mm であり（図 2-8），完形・完成形の優品である（西 1991）。清水町の羽帯遺跡では欠損品だが，長さ 222 mm（完形復元で長さ 300 mm）の大型品が出土している（山原 1996b）。枝幸町のタチカラウシナイ遺跡では，頁岩製の長さ 268 mm のバイフェイスと，148.9 mm の完形の尖頭器が表採されている（夏木 2020）。黒曜石以外の尖頭器の流通が道東にも展開していることを示している。

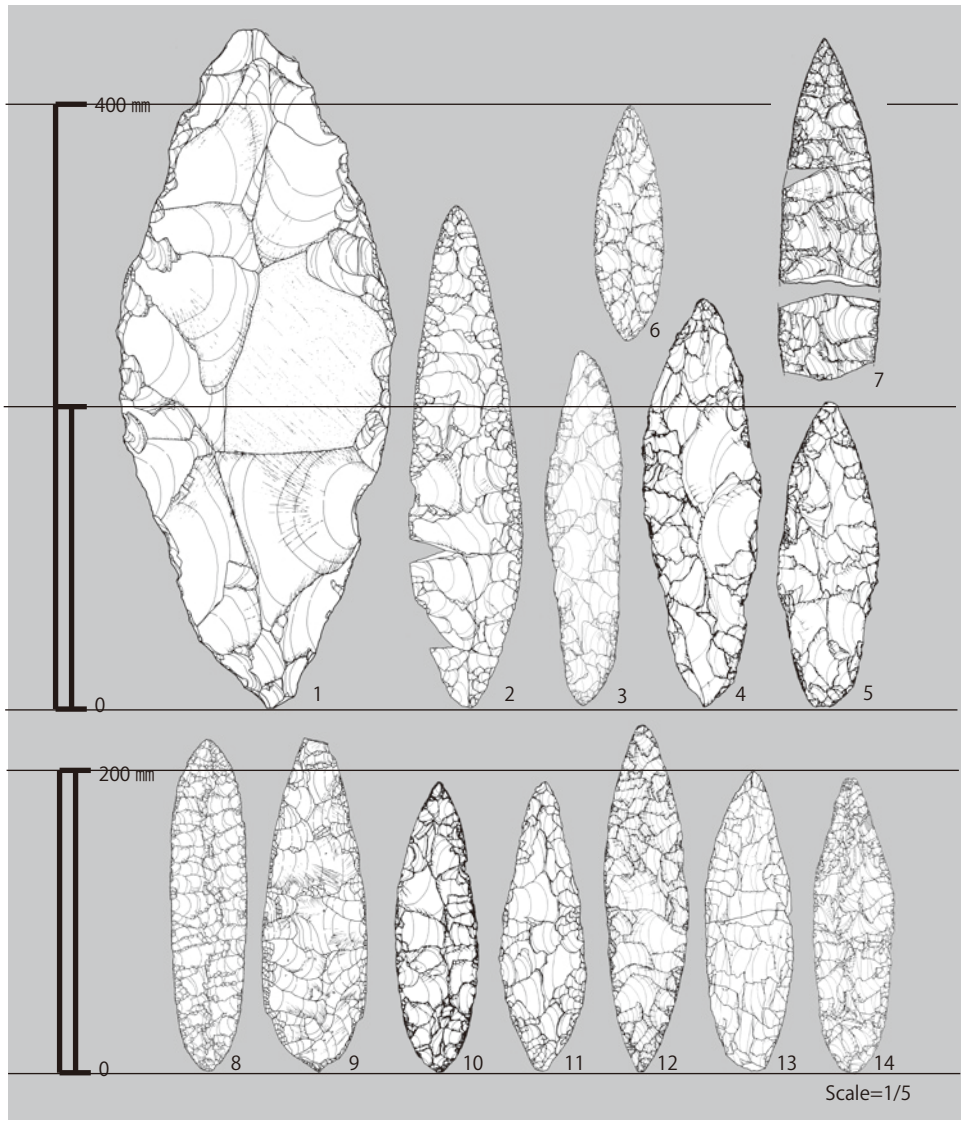
以上のように，北海道の大型尖頭器の完成品をみると，柳葉形や木葉形ばかりでなく，舌部を有する形態も多いようである。

縄文時代早期以降になると，超大型品が少なくなるが，より遠隔地へ運搬される大型品の事例が散見される。釧路市の東釧路貝塚では，2 点の大型尖頭器が前期の盛土中から重なって出土している（図 2-9）（釧路市埋文 2010）。キャッシュと考えられる特殊な出土状況である。黒曜石は道央にも流通し，恵庭市のカリンバ 2 遺跡では，前期の土坑墓から黒曜石製の両頭石槍（236 mm，幅 62 mm）が出土している（図 2-10）（恵庭市教委 2000）。同様の資料は採集品ながら，枝幸町（長さ 175 mm），釧路市達古部（長さ 171 mm），足寄町ワラン沢（長さ 222 mm）で発見されている（河本 1977，西 1970，清野 1969，宇田川 1981）。また，千歳市の美々・美沢遺跡群・美々 5 遺跡では，長さ 153 mm の黒曜石製尖頭器が前期の土坑墓から出土している（北海道埋文 1980）。さらに同遺跡の住居跡からは長さ 179 mm の尖頭器が，美々 8 遺跡の遺構外から長さ 216 mm の細身の尖頭器が出土している（図 2-11）。この尖頭器は「石器扱い」（長井 2009）が右肩上がりであり，本州的な製作技術の慣習に基づく点に注意したい。また，同遺跡からは，より小型の黒曜石製品が多数見付かっていることからも，ある程度安定した黒曜石流通のもとに大型尖頭器がもたらされたことが推察される（北海道埋文 1984）。

そして，縄文時代前期から中期の北海道産黒曜石の流通は，津軽海峡を越えて東北地方に達し，青森県の三内丸山遺跡（藁科 1999・2005，斎藤 2005）や中ノ平遺跡（青森県教委 1975），津山遺跡（青森県埋文 1997）で出土している。三内丸山遺跡では長さ 209 mm の白滝赤石山産の尖頭器があり（図 2-12），そのほかに置戸産や赤井川産の長さ 100 mm 以上の石器も出土している。中ノ平の尖頭器は，赤石山産だが，右肩上がりの石器扱いである点が，上記の美々 8 遺跡の事例と同様に注目される。

(2)　道南から東北地方の頁岩

珪質頁岩（硬質頁岩）の産地は，北海道の渡島半島から，東北地方の日本海側にかけて連なる（註 4）。この地域には，尖頭器製作遺跡が多数存在するはずだが，発掘された遺跡は決して多くはない。渡島半島の原産地遺跡として，今金町美利河 1 遺跡があげられる（北海道埋文 1985）。未成品で最大のものは，長さ 447 mm である（図 3-1）。完成品では，メノウ質頁岩のもので，長さ 331 mm が最大である（図 3-2）。それよりも



1・2 美利河 1、3 札苅 8、戸鎖、4 戸鎖、5 相野山、6 斗満、
7 武蔵関、8 寺ノ沢、9 大館市、10 綴子、11 上野 A、12 八森、
13 大刈野、14 遠藤山崎

図 3　東北日本における頁岩製大型尖頭器

小型だが，メノウ製（長さ 166.7 mm）や安山岩製（長さ 185 mm）の搬入品もあり，遺跡に残る大型品が必ずしもこの場で製作された訳ではないことを示している。

渡島半島では，縄文時代になっても大型尖頭器とその製作遺跡が見られる。函館市中

野 B 遺跡では，長さ 195 mm の尖頭器が早期中葉の土坑から出土している（北海道埋文 1996）。また，前期初頭の函館市富岡町遺跡では長さ 203 mm の基部が平らな尖頭器が出土した（千代 1991）。木古内町大平遺跡では，縄文前期後半の剥片集中（FC50）の中から長さ 237 mm の尖頭器が出土し，周辺の剥片類と接合する（北海道埋文 2017）。同遺跡では，長さ 150 mm 以上のものが 7 点（うち 180 mm 以上が 3 点）ある。完形の製品は，長さ 150 mm，幅 50 mm 以下の摘み付きナイフとなる。同町の札苅 8 遺跡では，前期後半の盛土から長さ 234 mm の尖頭器が出土している（図 3-3）（北海道埋文 2020）。長さ 150 mm 以上が 6 点（うち 180 mm 以上が 3 点）あり，比較的大型のものを含む。前期の八雲町山崎 5 遺跡（北海道埋文 2002）や後期前葉の木古内町釜谷 10 遺跡（北海道埋文 2018）でも長さ 200 mm 程の尖頭器が出土している。この地域では早期中葉以降，長期間にわたって大型尖頭器の製作が継続していたことが窺える。

一方，東北地方では，採集や偶発的発見によって得られた大型尖頭器が多い。例えば，青森県戸鎖遺跡の尖頭器（長さ 270 mm，幅 77 mm）があり（図 3-4）（中村 2006），東北地方で最大と思われる。そのほか，青森県相野山遺跡では長さ 201 mm の尖頭器がある（図 3-5）。形態的に縄文前期に属すると考えられる。青森県寺ノ沢遺跡では，長さ 221 mm の精巧な加工の尖頭器が採集された（図 3-8）（工藤 1977）。青森県綴子遺跡で大型の尖頭器 5 点が確認され，最大のものは折損品だが，長さ 197 mm である（図 3-10 は長さ 191 mm の完形品）。同様に，秋田県大館市からは出土地不明ながら，長さ 220 mm のほぼ完形の尖頭器が見つかっている（図 3-9）（大熊町史編纂委員会 1984）。

原産地近くに立地する尖頭器の製作遺跡としては，後期旧石器時代後半から旧石器時代終末に属する山形県上野 A 遺跡があげられる（米倉・阿部編 2002）。完形・完成品で長さ 200 mm，幅 55 mm が最大である（図 3-11）。その他は未成品・欠損品・失敗品ばかりであり，完成品は遺跡に残されていない。

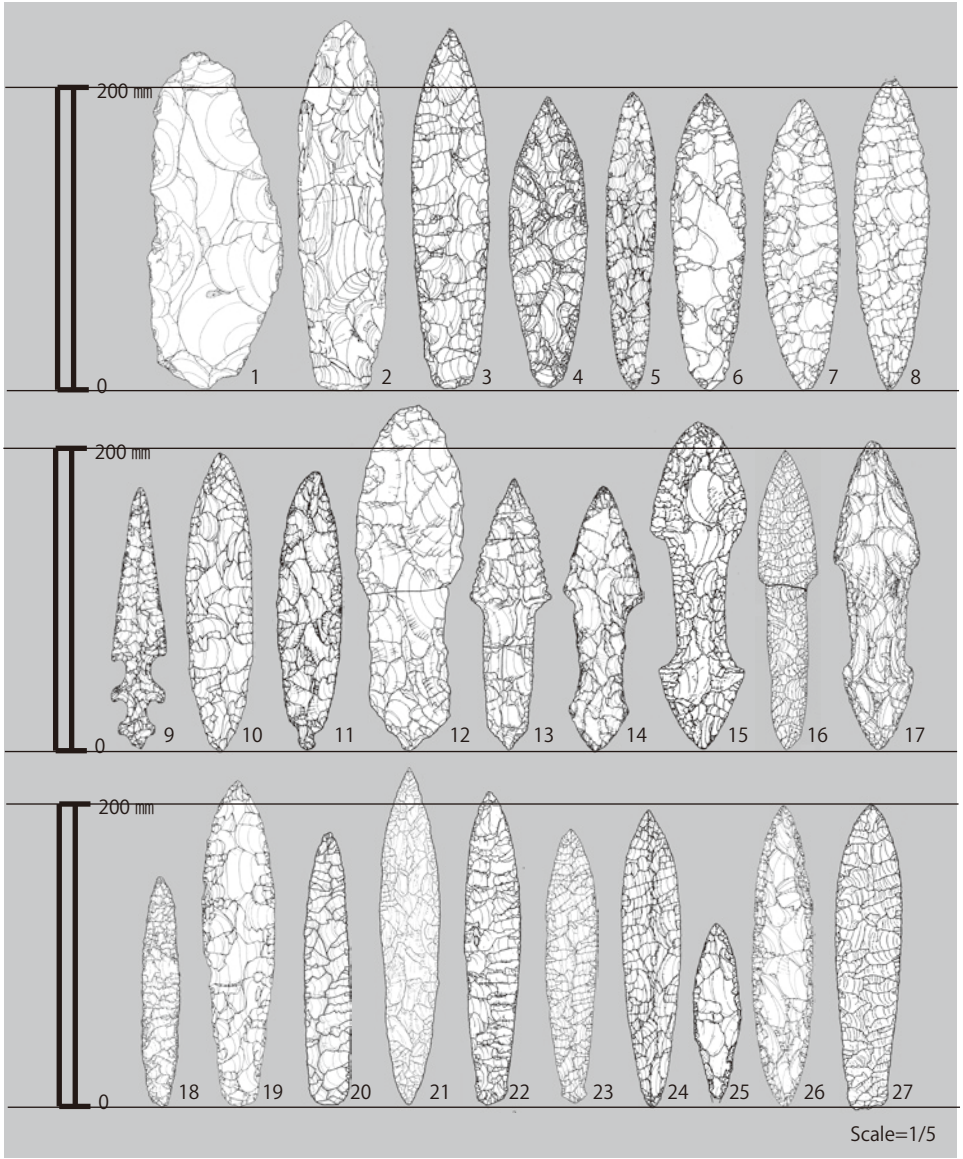
次に，神子柴・長者久保石器群の時期から草創期前半にかけての資料を見ると，山形県八森遺跡で限定的ながら石器製作が行われており，最大で長さ 230 mm の尖頭器が確認される（図 3-12）（八幡町教委 2003）。新潟県大刈野遺跡は製作遺跡であり，近在の頁岩製で長さ 198 mm の尖頭器が出土している（図 3-13）（湯沢町教委 1988）。頁岩製の神子柴型尖頭器は，東京都武蔵関遺跡で見つかっており，欠損品ながら長さ 227 mm，幅 48 mm である（図 3-7）（練馬区遺跡調査会 1987）。完形に復元すれば長さ 350 mm になろう。原産地から遥か遠くに位置するものの，完成品としては国内最大級であった

可能性がある。

草創期前半の山形県日向洞窟では多くの尖頭器類が出土しているが，最大のものは長さ 181.5 mm である（佐川・鈴木編 2006）。原産地から離れた遺跡としては，神奈川県遠藤山崎遺跡で長さ 194 mm の硬質頁岩製が出土している（図 3-14）（玉川文化財研究所 2003）。この尖頭器は先端が細く，再加工された可能性がある。また，長さ 100 mm を超える細身の尖頭器が下北半島沖や津軽半島沖の海底から発見されている（福田 1998）。北海道釧路沖の有舌尖頭器と同時期と思われ，当該期に海岸線付近に位置した遺跡があったことを示している。

草創期末の大型両面加工石器にも大型品があるが，トゥールではなく石核の役割をもったことから，今回の尖頭器の集成や統計には加えていない。原産地である秋田県岩瀬遺跡では，長さ 242 mm，幅 113 mm の両面加工石器素材が最大である（秋田県埋文 1996）。槍先形では長さ 198 mm，幅 73 mm が最大となる。原産地から離れた宮城県野川遺跡は，長さ 225 mm，幅 101 mm の槍先形を呈する両面加工石器が搬入されており，岩瀬遺跡のものを凌ぐサイズである（仙台市教委 1996）。この時期は，他の遺跡も含めて珪質頁岩製以外の両面加工石器は出土せず，画一的な石材利用となり，当該遺跡の分布も東北地方にほぼ限られる。

縄文早期から中期の東北地方北部では，青森県の 8 遺跡（沢ノ黒，富ノ沢（3），東道ノ上（3），畑内，新町野，石江，三内丸山，津山），秋田県の 6 遺跡（上ノ山 II，心像，樋向 I，大野地，池内，はりま館），岩手県 1 遺跡（新田 II）から，長さ 170 mm 以上の尖頭器が出土している（青森県埋文 1990・1996・1997・1998a・1998b・1999・2000・2006・2007・2008・2009・2012，青森市教委 2008，秋田県埋文 1988・1990・1997・1999・2008，川井町教委 1988，奈良・豊島 1967，藁科 1999・2005，遠野市教委 2002）。青森県ではその殆どが前期後葉から中期初頭に，秋田県では前期中葉から後葉に，岩手県では前期中葉に属する。樋向 I 遺跡では，原石の採掘からの初期工程が認められる（図 4-1）。心像小学校遺跡では，最終工程手前の尖頭器（図 4-2），はりま館，池内，上ノ山 II，富ノ沢（3），三内丸山，畑内遺跡では，完成形の大型品が認められる（図 4-3～8）。さらに，新町野遺跡（第 554 号土坑）の異形大型尖頭器（図 4-9）や，石江遺跡（6106 号土坑，6088 号土坑）の異形尖頭器と大型尖頭器，池内遺跡（SKS824）の大型尖頭器のように，副葬品と考えられる大型品が存在する。そうした遺跡では，北海道産の黒曜石製尖頭器が共伴し，頁岩製ほど大きくはないものの，同様に土坑墓に副葬される。青



1　樋向Ⅰ、2 心像小学校、3 はりま館、4 池内、5 上ノ山Ⅱ、6 富ノ沢（3）、
7 三内丸山、8 畑内、9 新町野、10　吹浦、11 墓窪、12~13 一ノ坂、14 下ノ平 D、
15 戸ノ口、16 入ノ内、17 渡場、18 坂ノ上、19 押出、20 中沢、21 下別当、
22 菖蒲ケ入、23 梨木平、24 梨ノ子木久保、25 南羽鳥遺跡群、26 羽根尾、27 井林

図 4　縄文時代の頁岩製大型尖頭器

森県牛潟（1）遺跡の土坑墓（65 号, 68 号）も, 長さ 150 mm や 168 mm の尖頭器を含み, 同様の事例と言える（つがる市教委 2010）。岩手県新田 II 遺跡では, 第 9･10 号住居（ロングハウス）から長さ 150 mm 以上の尖頭器が出土している。東北南部と関係の深い資料である。また，尖頭器の集積遺構（cache）が，富ノ沢（3）遺跡（3 点）や沢ノ黒遺跡（2 点）で確認される（註 5）。津山遺跡の第 57 号土坑の開口部には，長さ 134～173.5 mm，幅 51～78 mm の両面加工石器 7 点が集積されて確認される。これらの両面加工石器は草創期後半のものより粗い作りであるものの，規格的なサイズに整えられている。こうした大型尖頭器や両面加工石器の扱い方を見ると，それらの社会的価値を窺うことができる。

次に，東北地方南部に目を向けると，両尖匕首（両頭尖頭器・両頭石槍・抉入尖頭器）の流通が注目される。前期初頭の山形県一ノ坂遺跡では, 両尖匕首が集中的に製作され, 未成品で長さ 227 mm，幅 69.6 mm（図 4-12），完成品で長さ 170 mm，幅 50 mm 前後が複数出土している（図 4-13）（米沢市教委 1996）。欠損品でも長さ 179.6 mm，幅 52.1 mm のものがあり，より大型品が存在していたと予想される。山形県朝日村では, 長さ 200 mm の両尖匕首が発見され（江坂 1983），山形県日向洞窟でも長さ 202 mm の事例が報告されている（田中 1995）。福島県下ノ平 D 遺跡では，SK104 の底面から大型の両尖匕首（長さ 174 mm，幅 53 mm）が出土した（図 4-14）（福島市振興公社 1995）。福島県猪苗代町戸ノ口や，いわき市小川町芝原（入ノ内遺跡と推定）でも，大型の両尖匕首が発見されている（図 4-15・16）（樫村 2007，大熊町史編纂委員会前掲）。埼玉県小岩井渡場遺跡の第 11 号住居址（前期前葉）から長さ 204 mm の頁岩製両尖匕首が出土している（図 4-17）（田中 1988）。同様の資料は新潟県福平（頁岩製，長さ 201 mm）や高根（頁岩製，長さ 176 mm）に加えて（新潟県 1983），長野県榎海戸遺跡（長さ 247 mm の黒曜石製，完形に復元すれば約 300 mm）で確認されている（両角 1932）。富山県天神遺跡でも長さ 171 mm の黒曜石製の両尖匕首が出土している（斎藤・麻柄 1993）。このように黒曜石製品が頁岩産地から遥か離れた場所で見つかっているのは, 流通と模倣品製作の観点から注目される。

前期後葉の山形県吹浦遺跡では長さ 199 mm の尖頭器が出土した（図 4-10）（山形県埋文 1988）。前期前葉の山形県墓窪遺跡では石匙のような摘みの明瞭な尖頭器（長さ 183 mm）が確認される（図 4-11）（山形県教委 1982）。前期中葉の山形県押出遺跡では, 最大で長さ 214 mm の押出型ポイントが各種石器を集めた遺構から出土している（図

4-19）。弓手原 A 遺跡では，摘み付きの尖頭器が長さ 171 mm である。頁岩産地から離れた, 前期前葉の宮城県中沢遺跡では長さ 180～170 mm の大型品が 2 点出土している（図 4-20）（小暮ほか 2018）。また，宮城県下別当遺跡では，長さ 235 mm の大型品が採集されている（図 4-21）（蔵王町史編さん委員会 1987）。福島県菖蒲ヶ入遺跡では，長さ 209 mm の尖頭器が出土した（図 4-22）（梁川町史編纂委員会 1993）。空釜 B 遺跡（早期後葉～前期初頭）では, 基部を僅かに欠くが, 長さ 166 mm のものが出土している（福島県文化振興事業団 2009）。また，梨木平遺跡でもつまみ付きで長さ 180 mm のものがみられる（図 4-23）。さらに遠隔地となる茨城県梨ノ子木久保遺跡では，前期中葉の土坑墓の底面から, 石匙と共に長さ 196 mm, 幅 39 mm の尖頭器が出土した（図 4-24）（吹野 1995）。また，千葉県南羽鳥遺跡群中岫第 1 遺跡 E 地点では，前期中葉の土坑からやや大きめの尖頭器（凝灰岩製）が出土している（図 4-25）（印旛郡市文化財センター 1997）。神奈川県羽根尾貝塚（前期前半）では，大型局部磨製尖頭器（長さ 199 mm, 幅 40 mm）が出土している（図 4-26）（玉川文化財研究所 2003）。また，長野県芝原遺跡では，長さ 180 mm，幅 36 mm のものが採集されている（森嶋 1976）。さらに，時期認定は難しいものの，頁岩製の 150 mm 前後の尖頭器が，岐阜県（高山市上野町，西洞遺跡）にまで分布している（飛騨考古学会 2001）。その分布が下呂石産地付近にまで達していることが注目される。

このように早期後葉から前期前葉にかけて，東北地方南部を中心に，両尖匕首やつまみ付き大型尖頭器が流通している。中でも，前期初頭から中葉にかけてのものが大部分を占め，東北北部よりも年代的に先行する。また，東北地方北部と違って，南部では頁岩以外の石材を使った大型品がみられない。関東地方でも多くは前期前葉から中葉に帰属し，東北地方南部と一連の流通ネットワークに含まれると考えられる。

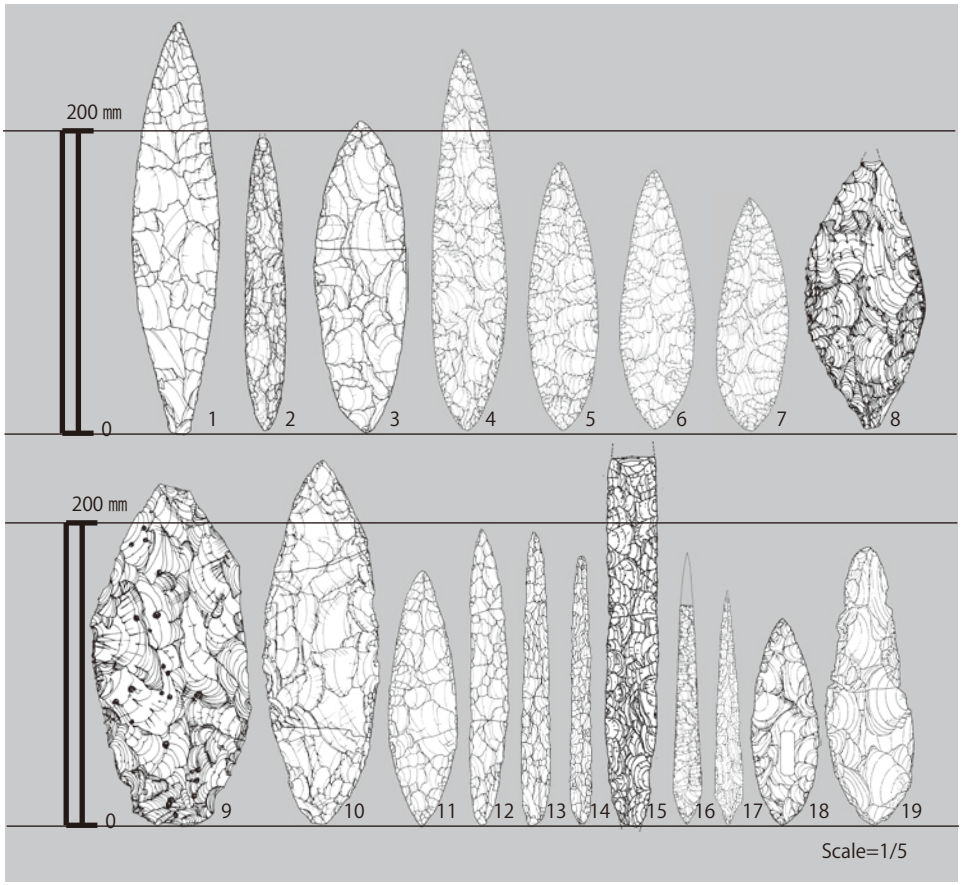
(3)　北陸，関東，中部地方にかけての多様な石材

北陸・関東から中部地方では，大型尖頭器の集中的な製作に適した石材原産地が限られる一方，各地で多様な石材が利用されている。例えば黒曜石では，本州各地の原産地を中心とした独自の流通網がある。本州の黒曜石製で完形・最大級のものは，原産地に近い長野県男女倉遺跡 B 地点（和田村教委 1975）の未成品で, 長さ 226 mm である（図 5-9）。同遺跡の加工の進んだ未成品は最大でも長さ 178 mm であり，一回り小さい（図 5-8）。同様に，原産地に近い唐沢ヘイゴロゴーロ遺跡（川上・神村・森山 1976）の有

樋尖頭器素材は長さ 233 mm，幅 91 mm と大きいが，完成に近いものは長さ 130～100 mm，幅 30～40 mm と大幅に小型となる。原産地から離れた長野県神子柴遺跡では，黒曜石製で完成・完形品の最大のものは，長さ 142 mm である（林・上伊那考古学会編 2008）。後期旧石器時代後半の栃木県高原山黒曜石原産地遺跡群剣ケ峯地区では，完形で長さ 140 mm，幅 56 mm の尖頭器が出土している（芹澤 2008，矢板市教委 2009）。未成品の完形では，長さ 181.5 mm，幅 62.5 mm のサイズもみられ，大型品と言える。原産地から離れた栃木県上林遺跡では約 120 mm の高原山産黒曜石製の有樋尖頭器（長さ 118 mm，幅 31 mm と長さ 113 mm，幅 40 mm）が出土している（佐野市教委 2004）。それよりも時期が後出するが，埼玉県西大宮バイパス No.4 遺跡では，高原山産黒曜石製の尖頭器が完形で持ち込まれている（大宮市遺跡調査会 1986）。神奈川県向原遺跡では，折れているが長さ 164 mm の神津島産黒曜石製の尖頭器が発見されている（神奈川県埋文 1992）。完形ならば，長さ 270 mm 程になり，黒曜石製の大型品が海を越えて流通したことを示している。以上のように，本州各地の黒曜石製品は原産地を中心とした独自の流通ネットワークをもつものの，北海道の黒曜石製尖頭器に比べて，大型品が少ない。

チャート製では，多摩ニュータウン No.426 遺跡第 I 文化層で接合資料に含まれる尖頭器（未成・失敗品，三分割）が認められる（図 5-10）（東京都埋文 1989）。遺跡内で製作されたものであり，長さ 238 mm，幅 77 mm と大型である。神奈川県栗原中丸遺跡では，長さ 168 mm，幅 46 mm のチャート製尖頭器が出土している（図 5-11）（神奈川県埋文 1984）。

ホルンフェルス製では，東京都岡本前耕地で長さ 112 mm の神子柴期の完形尖頭器が出土している（都立学校遺跡調査会 1998）。少し時代が下ると，東京都前田耕地遺跡で，長さ 195 mm，幅 25 mm のホルンフェルス製の大型品がみられる（図 5-12）（東京都教委 2002）。150 mm 以上の尖頭器が 10 点あるが，その石材はホルンフェルス以外にチャート，凝灰岩，頁岩など，多様である（図 5-13, 14）。こうした細身の尖頭器は，新潟県本ノ木遺跡に集中的な製作址があり，粗粒の頁岩製で長さ 150 mm 以上が 8 点（うち 3 点が長さ 180 mm 以上）あり（津南町教委 2016），いずれも未成品や折損品である。その完成した姿を，同町内の別当 A 遺跡の長さ 190.1 mm，幅 26.2 mm の頁岩製尖頭器に見ることができる（図 5-2）（津南町教委 2003）。この尖頭器の先端部には衝撃剥離痕が見られ，刺突具として使用された可能性がある。細身の尖頭器は関東地方とその周辺地域



1 上ノ平 C、2 別当 A、3 八風山ⅣB、4-7 神子柴、8-9 男女倉 B、
10 多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo.426、11 栗原中丸、、12-14 前田耕地、
15 山吹堂、16-17 鳴鹿山鹿、18 下呂町大原、19 国分台第 7 地点

図 5　北陸・関東～中・四国の大型尖頭器

に多く, 千葉県大六天遺跡で長さ 188 mm, 幅 19 mm の黒色頁岩製のものが見られる（橋本 2012a）。この類例は橋本勝雄によって集成されているが，千葉県内では 180 mm を超えるような事例はこれ以外になく，ほとんどは 150 mm 未満である。また，茨城県下の資料も橋本によって集成されているが，150 mm 程度より大きいものはほとんどなく（萩野谷・橋本 2015），先述の梨ノ子木久保遺跡例が最も大きい。

新潟県南部の向田遺跡では，尖頭器ではなく半月形石器ではあるが，頁岩製で長さ 239 mm，幅 61 mm の大型品が出土している（小林編 1983）。長野県山吹堂遺跡では上下を欠損した資料ながら（図 5-15），向田とほぼ同じ長さの玻璃質安山岩製の尖頭器片

（中間部）が確認されている（麻績村誌編纂会 1989）。完形に復元すれば長さは 300 mm に達する。

安山岩の原産地付近の遺跡として，長野県の下茂内遺跡（長野県埋文 1992）や八風山 IV 遺跡（佐久市教委 1999）があげられる。いずれの遺跡でも尖頭器はほぼ同様なサイズであり，下茂内ではある程度尖頭器の形態を呈する未成品で最大が長さ 196 mm，八風山 IV では最大が長さ 206 mm である（図 5-3）。150 mm 以上の尖頭器が前者では 5 点，後者では 4 点あり，これらも全て未成品や折損品であるため，原産地遺跡の特徴を示している。原産地から離れた場所では，新潟県上ノ平遺跡 C 地点で，長さ 270 mm，幅 57.7 mm の搬入品（無斑晶質安山岩）が出土している（図 5-1）（新潟県埋文 1996）。この尖頭器は当該地域で最も大きい。遺跡内の他の尖頭器は小型であり，石材も異なる。富山県新町 II 遺跡では，発掘時の排土中から長さ 110 mm，幅 48 mm の尖頭器中間部（輝石安山岩製）が出土した（富山県埋文 1986）。復元長 190 mm に達し，県内では例外的な大型品である。石川県の雲津では，輝石安山岩製の尖頭器で長さ 202 mm，幅 39 mm の大型品が採集されている（平口 1976）。同県の井林でも長さ 200 mm，幅 44 mm の尖頭器が採集されており（図 4-27），こちらは形態から縄文前期に属する可能性がある。

玄武岩製では，長野県横倉遺跡で長さ 150 mm 以上のもの 2 点を含む一括資料がまとまって出土した（神田・永峯 1958）。福井県鳴鹿山鹿遺跡では，最大で長さ 150 mm に達する有舌尖頭器を含む計 23 点が集積されて出土した（図 5-16, 17）（福井県埋文 1980）。欠損品の復元長は 180 mm を超え，かなり大型の有舌尖頭器が多出している。それらの石材は流紋岩やチャート，玻璃質安山岩，砂岩，安山岩など多様である。今回の集成では尖頭器に含めていないが，鳴鹿山鹿には尖頭状石器（玻璃質安山岩製）があり，その長さは 525 mm，幅 104 mm であり，もし尖頭器の一種とするならば国内最大である。

下呂石（湯ヶ峰流紋岩）の産地付近では，岐阜県大林遺跡で長さ 238 mm の未成品で素材形状を留めるものがある（下呂町教委 2002）。完形の大型品（180 mm 以上）の事例はなく，破損資料を復元すれば，200 mm を超えると予想される資料が存在する（飛騨考古学会旧石器分科会 2001）。この地域では，下呂町大原で採集された尖頭器（長さ 140 mm）が完成品としては最大である（図 5-18）。下呂石の産地から離れた長野県神子柴遺跡では，長さ 251 mm の下呂石製尖頭器が出土している（図 5-4）（林・上伊那考古学会編　前掲）。同遺跡では，長さ 176 mm の凝灰質頁岩製（図 5-5）や長さ

171 mm の玉髄製（図 5-6），長さ 142.5 mm の黒曜石製の尖頭器が共伴し，石材流通の特徴が凝縮された姿を呈している。下呂石産の尖頭器は，遥か東方の千葉県六通神社南遺跡からも 4 点が出土している（千葉県文化財センター 2003）。尖頭器は下呂石や安山岩製であり，完形で長さ 51～111 mm の中・小型品が中心である。その中には奈良県二上山産とされる安山岩（サヌカイト）が 4 点含まれている。トゥールには東北地方日本海岸産と思われる頁岩も組成しており，多様な産地に由来する道具が集まっている。

このように関東・北陸・中部地方では大型品が散見されるものの，使用石材は多種であり，同一の遺跡内においても多様な石材が用いられる傾向にある。一方，製作技術や尖頭器の形態は遺跡内で共通しており，同一の技術が駆使されたものと考えられる。大型尖頭器の所属時期は限定的であり，神子柴・長者久保石器群の時期か，その直後の有舌尖頭器の盛行期であろう。その後は，先述の頁岩製が前期前半頃に千葉県や神奈川県にまで達している事例があり，東北地方南部の動きと一部連動している。

(4)　近畿・中国・四国地方のサヌカイト・ガラス質安山岩

近畿地方では，大型の尖頭器が見当たらず，奈良県桐山和田遺跡の長さ 117 mm の未成品が最大のようである（橿考研 2002）。

中四国地方のサヌカイトまたは無斑晶ガラス質安山岩の原産地付近の製作遺跡を見ると，香川県羽佐島遺跡では，最大 188 mm，幅 31.5 mm の有舌尖頭器が認められる（香川県教委 1980）。香川県国分台遺跡第 7 地点では，最大で長さ 190 mm，幅 58 mm の尖頭器が出土している（図 5-19）（竹岡 1988）。広島県冠遺跡第 10 地点では，未成品であるが最大で長さ 182 mm, 幅 76.5 mm のものが出土した（広島県教委他 1983）。ここでは，黒曜石製（長さ 82 mm，幅 34 mm）もあり，搬入品が含まれる。また，岡山県陣山遺跡でも尖頭器未成品が確認されているが，長さ 100 mm 前後のものが多い（高梁市教委 1999）。縄文時代前期と考えられる高知県藤の川では，長さ 241 mm の粘板岩製が出土しており，両頭石斧とも呼ばれる特殊な形態である（岡本 1966）。それより少し小型ながら，高知県根元原では，サヌカイト製の長さ 180 mm の類例が出土している（高知県 1968）。

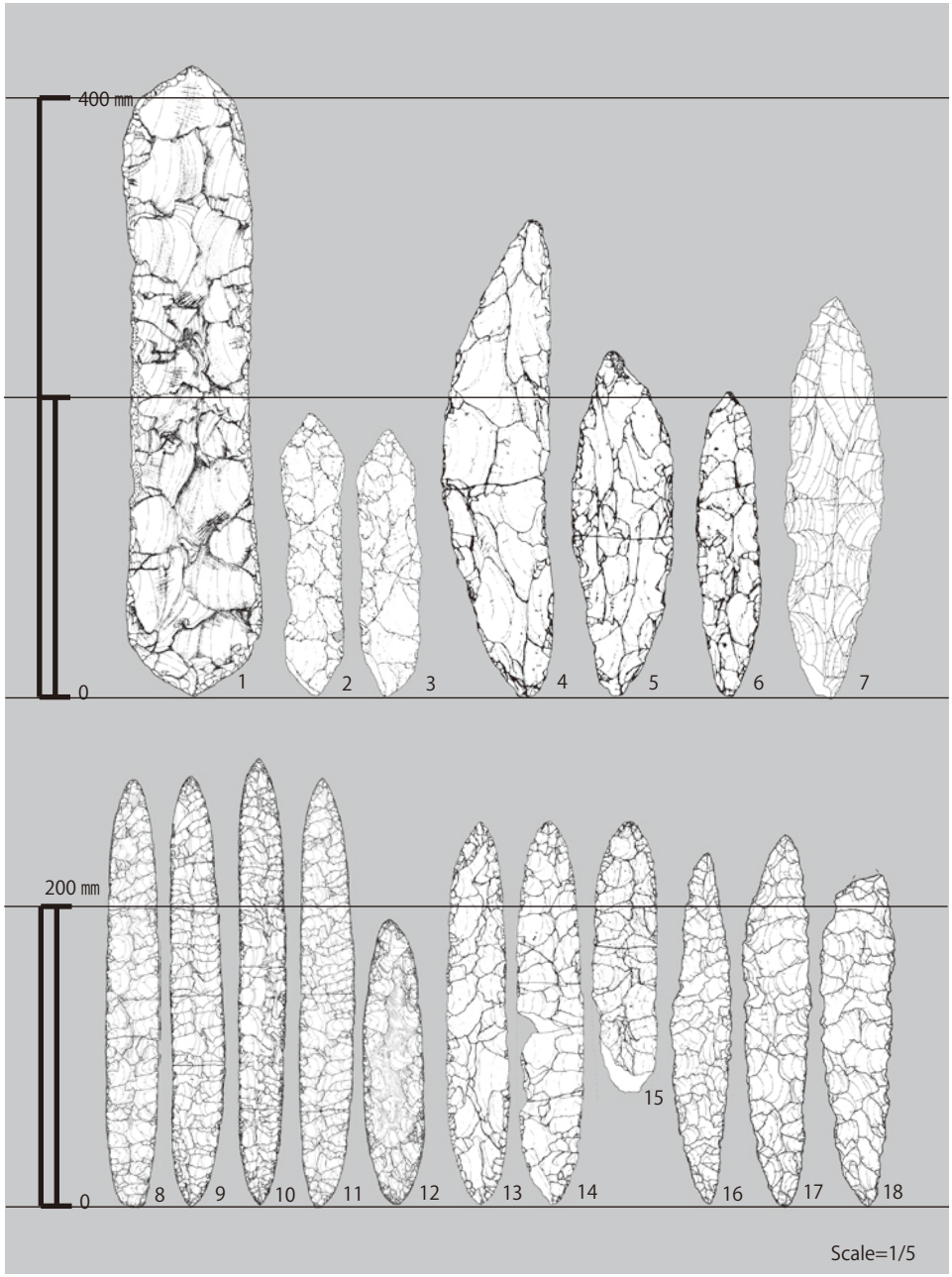
このように，他の地域に比べて，関西から中四国地方の尖頭器は小型である。大型品は未成品であっても，長さ 190 mm 以下である。

(5)　九州地方の安山岩

九州では局部磨製の尖頭器が縄文時代草創期末から早期前葉にかけて出現し，地域的特徴となっている。そして，当地方では，尖頭器製作に安山岩が主体的に利用されている。特に安山岩の産地として著名な佐賀県多久付近には，大型尖頭器の製作遺跡がある。例えば，多久三年山・茶園原遺跡では，長さ 186 mm の未成品が（杉原・戸沢・安蒜 1983），茶園原遺跡 IX 地点では長さ 188 mm と 178 mm の圭頭形の尖頭器が出土した（図 6-2, 3）（多久市教委 1980）。圭頭形については，かつてナイフ形石器文化に並行すると報告されていたが（杉原・戸沢・安蒜 1983），その後，縄文時代前期の抉入尖頭器とみなされるに至った（田中 1995）。茶園原西畑遺跡第 I 地点では，最大で長さ 318 mm，幅 75 mm の尖頭器未成品が出土した（図 6-4）。その他 5 点の未成品が長さ 200 mm を超す（図 6-5, 6）。同 II 地点でも同様の未成品で長さ 180 mm を超えるものが 2 点出土している（多久市教委 1979）。茶園原 A 地点では，長さ 265 mm，幅 65 mm の完形・未成品が採集された（図 6-7）（岩永 1997）。長尾開拓遺跡では，最大で長さ 230 mm，幅 57 mm の未成品があり，完形ならば長さ 250 mm 近い（佐賀県教育庁 1988）。報告書に記載されているものだけでも，長さ 160 mm 以上のものが 20 点あり，うち 5 点が 200 mm を超える。当地域の他の遺跡でも比較的大きな尖頭器が多数出土している。こうした大きめの尖頭器の製作は，早期前葉に遡り，佐賀県小ヶ倉遺跡では，無斑晶質安山岩製の未成品が長さ 231 mm，幅 96 mm，完成品は最大で長さ 123 mm である（佐賀県教委 2011）。

また，長崎県泉福寺洞窟では長さ 124 mm，幅 26 mm の安山岩製尖頭器が出土している（佐世保市教委 1984，辻田 2003）。押型文土器に共伴する。同市内の岩下洞穴では，条痕文・押型文に共伴して局部磨製尖頭器が出土している（佐世保市教委 1968）。特に 19 号人骨の胸部付近に抱かれるように局部磨製尖頭器 5 点（最長のもので 115 mm）が副葬されている点は注目される。福岡県大原 D 遺跡第 8 地点（福岡市教委 1996）や元岡・桑原遺跡群（福岡市教委 2004）の尖頭器もこれらの類例である。また，長崎県百花台 D 遺跡では，長さ 152 mm，幅 35 mm の玄武岩製の尖頭器が出土し，3 層の押型文土器に共伴する（長崎県教委 1988）。これらの北部九州の尖頭器は主に縄文早期前葉に属し，前述の北海道と本州の尖頭器よりも小型である。

次に九州南部では，安山岩製尖頭器が搬入されている。熊本県柿原遺跡では，大型の尖頭器 3 点（長さ 253 mm と長さ 254 mm，もう 1 点の破損品も同様の長さと推定）が



1　辰之元、2・3 茶園原IX地点、4-6 茶園原西畑第Ⅰ、
7 茶園原 A、8-12 園田、13-15 柿原、16-18 吹上中原

図 6　九州地方にける安山岩製大型尖頭器

採集されている（図 6-13～15）（杉村 1967・1985）。これらはサヌカイト製であり，約 1 × 2 m の範囲から，黒曜石製のスクレイパー状石器 1 点と共に出土した。宮崎県辰之元遺跡では，長さ 420 mm，幅 91 mm の，圭頭形の尖頭器が採集された（図 6-1）。玻璃質安山岩製であり，研磨・摩耗痕がある（横田 1987）。

種子島の園田遺跡では，尖頭器 9 点分と磨石 1 点が 3 か所に分かれて，一括出土した（中種子町教委 2004）。その中には安山岩製で長さ 290 mm 前後，幅 35 mm 前後の尖頭器が 4 本含まれる（図 6-8～11）。尖頭器の多くに研磨痕が見られ，局部磨製である。出土状況からデポ的様相が指摘される。層位的にはアカホヤ火山灰（III 層）の下位，サツマ火山灰や三角山降下軽石を含む層（IV 層）から出土している。岩本式や塞ノ神式土器（早期前葉と後葉）が同層から出土するが，石器の集積に共伴するものではない。したがって，草創期～早期の尖頭器と言う他ない。

鹿児島前原遺跡では，全磨製の石槍（長さ 203 mm，灰青色の頁岩製）が出土し，早期前葉の前平式土器に共伴する（鹿児島県埋文 2007）。また，鹿児島県吹上中小原遺跡の大型の尖頭器 3 点（長さ 155～173 mm，幅 27～34 mm）が集積状態で出土した（図 6-16～18）（鹿児島県埋文 2005）。やはり前平式土器に共伴する。両遺跡の尖頭器は園田遺跡より粗い加工であるが，出土状況が類似する。鹿児島県久保遺跡では長さ 166 mm，幅 31 mm の頁岩製尖頭器が採集されている（鎌田 1997）。宮崎県天ケ城跡でもサヌカイト製の尖頭器（長さ 155 mm，幅 38 mm）が前平式土器などに伴う（高岡町教委 1998）。鹿児島県帖地遺跡の玻璃質安山岩製の尖頭器も類例である（喜入町教委 1999）。南九州の大型尖頭器の多くが縄文時代早期前葉に属する可能性が高く。確実に後期旧石器時代終末や草創期に属すると言えるものは見られない。

5　考　　察

(1)　製作と交換・交易の観点から

大型尖頭器の製作には，尖頭器製作の熟練者が関与していることが予想される。北海道では，原産地に近い白滝遺跡群や美利河 1 遺跡の事例では，尖頭器や有舌尖頭器に大小があるが，かなり規格的に相似形の製品が仕上げられている。そして，旧石器時代終末から縄文時代草創期の北海道の有舌尖頭器には左肩上がりの平行剥離となる「石器扱い」が認められ，その頃の本州では逆に右肩上がりとなる（長井 2009）。本州では草創

期以降，前期に至るまで右肩上がりの石器扱いが継続するのに対して，道南では右肩上がりに変化し，本州化（縄文化）する。すなわち，大型尖頭器の出現した当初は，北海道と本州の製作者間に技術的慣習の隔たりがあったものが，後に一体化したことを示している。また，原産地から離れた遺跡（沙瑠，斗満遺跡）においても，異なる石材間でも同一遺跡内の尖頭器の形態は相似し，一貫した技術が駆使されている。製作地以外では，単独出土か，デポやキャッシュの状況での出土が目立つ。さらに，縄文早期中葉以降になると，大型尖頭器は製作地ではなく，主に集落跡から見つかるようになり，土坑墓や住居から発見される事例も散見される。

本州の神子柴・長者久保石器群や草創期前半（有舌尖頭器の隆盛期）には，列島の各地で，広範囲の遊動と，各集団間の交換が行われていたと推定される。安斎正人（前掲）によって指摘されるように，本州の東北部に最初に大型尖頭器が表れて，その直後に本州の南西部や北海道へ大型尖頭器の技術と概念が展開し，九州へ広がったのが縄文時代早期初頭と言える。九州の縄文早期遺跡では，岩下洞穴のように尖頭器が副葬品として人骨に伴う事例が確認されるが，そうした事例は限られる。この大型尖頭器伝統では，デポまたはキャッシュと呼ばれるような尖頭器の集積が列島の広い範囲で確認される。この石器集積の存在は尖頭器の余剰を示し，大型尖頭器の交換を可能にした一要素と言える。すなわち，1 集団内で必要となる数量を超えて，大型の尖頭器が完成形で準備され，集められる。これによって，集団間での交換が可能となり，大型尖頭器を広域に展開せしめたと推察される。デポやキャッシュについては，既に膨大な基礎資料が蓄積されていることから，論を改めて検討したい。

北海道から東北地方にかけて，上述とは別の大型尖頭器伝統が展開する。渡島半島では早期中葉から後期前葉にも大型尖頭器が認められるが，前期にひとつのピークがある。東北地方北部（青森・秋田）では，前期中葉から中期初頭にかけて大型尖頭器と異形尖頭器の組み合せが見られる。さらに，中期になると北海道東部の黒曜石も含めて流通品が多く入って来る。東北地方南部では，縄文時代早期末から前期中葉にかけて，摘み（または茎部）付きの大型尖頭器がみられる。特に前期初頭から前葉にかけて両尖匕首と共に隆盛する。このような大型品を含むこれらの尖頭器類は，地域間交流を反映する流通品であったと考えられる。その地域内の象徴的な道具であっただけでなく，他地域では威信的な価値を有したと思われる。そして，それらの道具が土坑墓から出土することを考えれば，特定の個人の所有物として副葬されるような存在であったと推定される。そ

うした副葬品の所持者を，首長や階層上位者として評価することは妥当であろう。

次に，尖頭器の形態に着目すると，神子柴期や草創期前半の尖頭器の最大幅が基部側にあるのに対して，縄文時代早期から中期の尖頭器の多くは中間部から先端部側に最大幅が位置している。また，早期末から前期にかけて両尖･両頭や抉入，摘みや基部付き，異形のものまで多様な形態が見られるようになる。このような形態差は，地域差を反映するだけでなく，着柄法を含めた機能差も表している可能性があるため，今後の検討課題である。

最後に石材差が製作技術に与えた影響について検討したい（付図3）。頁岩，安山岩，黒曜石を比べると，明らかに黒曜石製に大型尖頭器が多い。そして，3者の中で，意外なことに頁岩製で超大型品（長さ250 mm以上）の割合が少ない。また，黒曜石と頁岩製に対して，安山岩製では細身の尖頭器が多い。そして，安山岩製に局部磨製が多いのは，安山岩が他の石材に比して軟質で研磨に適していることに起因すると思われる。なお，北海道では，黒曜石産地の利用が環境変動と関係した可能性も指摘されており（鈴木2016），より緻密な原産地と中継地，消費地と石器製作工程の関係を検討し，各時代の生産・流通体制における各石器のライフヒストリーを理解する試みが必要である。

(2)　威信財と過剰デザインの観点から

過剰デザインとなる大型尖頭器伝統の出現地を見れば，その発生した社会的背景を窺うことができる。考古学編年に基づけば，神子柴・長者久保石器群の中で，大型尖頭器が発生した可能性が高い。尖頭器自体は後期旧時代後半から存続するが，長さ200 mmを超えるような大型品が出現するのは，本州では山形県八森遺跡や新潟県大刈野遺跡の頃と考えられる。すなわち，直前には札滑型細石刃核を持つ石器群が本州に到来し，その後に大型尖頭器が出現したことになる。そして，大型尖頭器を生み出した神子柴・長者久保石器群の中に，最初の土器が誕生している。現状では，本州における湧別技法の登場は約14,250 BPより古く（芹沢・須藤編2003），神子柴・長者久保石器群の年代が13,800～13,000 BPであるため，その間に大型尖頭器が出現したと推定される（註6）。残念ながら，本論で取り上げた大型尖頭器が出土した遺跡自体での年代測定事例がなく，断定的な年代を示すことはできない。最も確実なのが，より後出と考えられる本ノ木型が出土した前田耕地遺跡の約13,000 BPであり（Morisaki et al 2019），それより前には大型尖頭器が出現していたと見られる。ちなみに，細身の長大な尖頭器である「本ノ木

型」の出現の背景に，植刃器（細石刃をはめこんだ骨角製槍）との関係が指摘されているが（橋本 2012b），筆者は大型尖頭器を生み出した背景に植刃器の存在があり，本ノ木型はその後に二次的・間接的に生まれたものと推定している。

次に北海道であるが，幅広の有舌尖頭器に伴うような大型尖頭器が最古の段階のものと思われる。発掘資料では美利河 1 遺跡や白滝 18 遺跡が該当しよう。従来の北海道の旧石器編年では大型尖頭器・有舌尖頭器は札滑型細石刃核石器群よりも後出と考えられていたが，近年の研究では幅広有舌尖頭器石器群を，札滑型細石刃核石器群に並行させる説も提示されている（直江 2014）。この編年案に従えば，北海道でも異なる 2 つの石器群が共存した状況下で，大型尖頭器が出現したと言うことができよう。北海道でも札滑型細石刃核が 15,000～14,000 BP の年代であるとの評価がほぼ定まっている一方，幅広有舌尖頭器の年代は確定的なものがない。いずれにせよ，北海道と本州では約 15,000～13,000 BP の頃に，大型尖頭器が出現した可能性があり，東北・北海道の両地域で 2 つの異なる石器群（それを保持した集団）の共存があったことが推定される。なお，北海道では，多数の大型尖頭器の完成品が 1 つの遺構から出土した事例がなく，本州とは特徴が異なる。本州の神子柴石器群の遺跡では，デポやキャッシュ状の出土状況が顕在化し，縄文早期の南九州までその伝統が広がっている。この遺構の成因については，祭祀的な集積跡，墓跡への副葬，あるいは居住域への遺棄や集積など諸説あるが，いずれにしても大型尖頭器の出現と関連ある行動の結果と考えられる。

さて，ここまで，過剰デザインの出現に対する安斎正人の仮説を追認した形であるが，大型尖頭器の存在を威信財システムの概念で理解できるかについては，以下で検討したい。大型尖頭器の機能研究は十分に進んでいないが，堤隆による研究では，小型の尖頭器に使用痕が見られるのに対して，大型のものには，明確な使用痕が見いだされなかった（堤 2008）。また，他の遺跡では中型の尖頭器には，衝撃剥離痕が認められるものが存在する（鹿又 2013）。したがって，大型品は実用品としての使用痕を残すような利用をされたものではなく，異なる機能を有した可能性がある。一方で，これより時期が下るが，中沢遺跡の資料では，長さ 180 mm の最大の尖頭器（図 4-20）は未使用であるが，170 mm 以下の尖頭器には使用と刃部再生の痕跡が残ることを確認している（鹿又・小暮 2018）。また，押出遺跡では最大の押出型ポイント（図 4-19）は分析していないものの，分析対象中の長さ 150 mm 以上のものには使用痕が認められず，1 例を除いて長さ約 120 mm 以下のものにしか使用痕が認められなかった（鹿又 2009）。このような大型

尖頭器に使用痕が認められない傾向は，威信財特有の使用履歴を反映している可能性がある。現状では，大型尖頭器の使用に関する実践的研究が限られるため，今後追求していきたい。

最後に，威信財の可能性のある大型尖頭器のライフヒストリーを見る場合，その石器表面の詳細な観察が求められる。遠隔地からもたらされた黒曜石では，石器表面に様々な摩耗や，風化度の違いなどが観察される（斎藤 2005）。大型の尖頭器や両面加工石器には，運搬痕跡（近藤 2000，鹿又 2010，堤 2018）や再加工・刃部再生の痕跡（北沢 1992）が見られることも多く，特異なライフヒストリーを辿っている。しかしながら，本論の対象となる資料では，使用・再加工・運搬などの痕跡の確認がなされた資料が殆どなく，検討課題となっている。また，威信財という概念自体が先行研究の各論文中で用いられるニュアンスに差異があり，実践的研究を通じてその具体像を叙述することが求められる。

6　まとめと課題

本論での検討の結果，最大の尖頭器は長さ 400 mm を超え，国内に 3 例（美利河 1，辰之元，沙留）が認められた。完成した木葉形・柳葉形尖頭器では，全長が残るもので長さ 331 mm（美利河 1）が最長であり，全長が残らないものではその長さが推定長 500 mm（斗満遺跡）や，推定長 350 mm（武蔵関遺跡）などの事例がある。完成品では一部の事例を除けば，長さ 250～280 mm のものがおよそ最大級と言うことができる。なお，近畿から中・四国地方には完成品の大型尖頭器がほとんど見られないため，過剰デザインが不要であったと推定される。旧石器時代終末から縄文時代草創期前半では，形態的な親縁性が高い尖頭器が広域に分布している。一方，縄文前期を中心に各地でみられる大型尖頭器（長さ 200 mm 前後）の形態は，地域的ごとに多様な特徴をもっており，人を介した交換・交易によって流通したことを示している。

本論で述べた大型尖頭器の特殊性や象徴的性格については，海外でも類例があり，広く議論されている。そのような海外の研究事例は日本の研究にも大いに参考になり，こうした過剰デザインの道具が如何なる社会的環境の下に成立するのかを検討する上で有効な参照材料となる。例えば，大型尖頭器の存在は，フランスの後期旧石器時代ソリュートレ文化が有名である。特に，Volgu 遺跡では 15 点の大型尖頭器が出土しているが，

最大のものが長さ 342.7 mm，幅 81.34 mm，厚さ 7.42 mm である（Kilby 2018）。うち 12 点が完形で，10 点が 250 mm 以上の長さである。良質のフリントで製作されており，極めて精巧な製品である。この遺跡の尖頭器は，ソリュートレアンの尖頭器の中でもとりわけ大きい。その製作過程も極めて規則的であり（Inada 2016），その背後には熟練製作者の存在が窺える。こうした大型尖頭器が，異集団の接触するような社会環境の下で発生したかは議論の余地がある。

また，ロシアでは，アムール川下流域のオシポフカ文化で大型（長さ 150～200 mm）の尖頭器が確認されている。例えば，Goncharka 1 遺跡では長さ 145 mm の尖頭器が副葬されていた可能性が指摘され（Tabarev 2019），小型尖頭器 4 点の集績も確認されている。また，Oshinovaya Rechka 10 遺跡では石斧 3 点の集積が確認されている（橋詰ほか 2018）。このような尖頭器が土坑墓に副葬されるのは，先述の縄文時代前半の北日本地域と共通する。さらに，サハリンでも遺跡名は不明ながら，長さ 325 mm の頁岩製の有舌尖頭器が見つかっており，北海道との文化的連続性を想定できる。こうした大型尖頭器に対する国際的評価についても今後の課題のひとつであり，共同研究を通じて明らかにしていきたい。

謝　　辞

以下の諸氏から，有益な助言，情報提供，文献の提供を受けた。記して謝意を表したい。柳田俊雄，阿子島香，高橋哲，菅野智則，佐野勝宏，柳田裕三（敬称略，順不同）

註

1）法量が記載されていない場合は，図面から長さ・幅などを割り出した。石材についても報告年度や分類基準によって記載内容に相違が大きいため，大まかな分類に留めた。

2）紙数の関係で，本文中の文献の引用の際，（財）○○県埋蔵文化財調査センターや（財）○○県埋蔵文化財調査事業団埋蔵文化財センターなどは，「○○県埋文」と略し，◎◎市教育委員会は◎◎市教委と略した。

3）該当資料には，頁岩製では奥白滝 1（長さ 89 mm，幅 42 mm），白滝 18 の長さ 8 cm 前後の有舌尖頭器 3 点，服部台 2 の欠損した有舌尖頭器，上白滝 8 の細身（長さ 126 mm，幅 21 mm）の有舌尖頭器，上白滝 2（長さ 93 mm，幅 19 mm や長さ 114 mm，幅 20 mm，長さ 133 mm，幅 20 mm）の有舌尖頭器，旧白滝 5 の尖頭器（長さ 103 mm，幅 35 mm）。安山岩製では，奥白滝 1 の尖頭器（長さ 105 mm，幅 35 mm），旧白滝 3 の尖頭器（長さ 120 mm，幅 42 mm）。その他，奥白滝 1 遺跡の碧玉製尖頭器（長

さ 84 mm，幅 42 mm）がある。

4）　珪質頁岩や硬質頁岩，頁岩など，報告書によって，岩石名の記載が異なっている。本論では広く「頁岩」として一括して記載した。

5）　筆者はかつて，当該石器を縄文時代草創期後半の大型両面加工石器と判断したが，通時的な比較を通して，縄文前期に属するものと判断した。

6）　測定年代の提示を目的とし，本論で用いる年代はすべて C^{14} 年代値である。暦年較正年代や実年代ではない。

引用文献（五十音順）

青森県教育庁文化課（鈴木克彦・松山　力・市川金丸ほか）1975『中ノ平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書 25

青森県埋蔵文化財調査センター（北林八洲晴・木村鐵次郎）1996『畑内遺跡 3』青森県埋蔵文化財調査報告書 187

青森県埋蔵文化財調査センター（笹森一朗・茅野嘉雄）1997『津山遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 221

青森県教育庁文化課（岡田康博・中村美杉・齋藤　岳ほか）1998a『三内丸山遺跡 9』青森県埋蔵文化財調査報告書 249

青森県教育庁文化課（白鳥文雄ほか）1998b『富ノ沢（3）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第 147 集

青森県埋蔵文化財調査センター（木村鐵次郎・笹森一朗・佐々木雅裕ほか）1999『畑内遺跡 5』青森県埋蔵文化財調査報告書 262

青森県埋蔵文化財調査センター（木村鐵次郎・笹森一朗・茅野嘉雄）2000『畑内遺跡 6』青森県埋蔵文化財調査報告書 276

青森県埋蔵文化財調査センター（野村信生・田中珠美・斉藤慶吏）2007『沢ノ黒遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 435

青森県埋蔵文化財調査センター（山田雄正・神　康夫・三浦一範ほか）2008『石江遺跡・三内沢部（3）遺跡 3』青森県埋蔵文化財調査報告書 458

青森県教育庁文化財保護課（小笠原雅行・永嶋　豊・浅田智晴・齋藤　岳）2009『三内丸山遺跡 35』青森県埋蔵文化財調査報告書 478

青森県教育庁文化財保護課（齋藤　岳・永嶋　豊・茅野嘉雄・岩田安之）2012『三内丸山遺跡 38』青森県埋蔵文化財調査報告書 519

青森市教育委員会（小野貴之・蝦名　純）2006『新町野遺跡発掘調査報告書 III』青森市埋蔵文化財調査報告書 87

青森市教育委員会（小野貴之・蝦名　純・木村淳一）2008『新町野遺跡発掘調査報告書 IV』青森市埋蔵文化財調査報告書 98

明石博志 1996「斗満遺跡の発見について―関連事項を含めて―」『北海道旧石器文化研究』第 1 号 pp. 11-12

秋田県埋蔵文化財センター（大野憲司・柴田陽一郎・栗澤光男ほか）1988『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 II　上ノ山 I・館野遺跡・上ノ山 II 遺跡』秋田県文化財調査報告書 166（秋田県教育委員会）

秋田県埋蔵文化財センター（大野憲司・小林　克・栄　一郎・高橋　学）1990『はりま館遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書 192

秋田県埋蔵文化財センター（利部　修・谷地　薫）1996『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 22　岩瀬遺跡』秋田県文化財調査報告書 263

秋田県埋蔵文化財センター（櫻田　隆・五十嵐一治・長澤和則）1997『池内遺跡』秋田県文化財調査報告書 268
秋田県埋蔵文化財センター（櫻田　隆・五十嵐一治ほか）1999『池内遺跡　遺物・資料編』秋田県文化財調査報告書 282
秋田県埋蔵文化財センター（利部　修・菅原幹夫・今野沙貴子）2008『鹿渡渉 2 遺跡・樋向 1 遺跡・樋向 2 遺跡・樋向 3 遺跡・大沢 1 遺跡・大沢 2 遺跡』秋田県文化財調査報告書 436
秋田市教育委員会（安田忠市ほか）2009『河原崎遺跡』
安斎正人 2001「長野県神子柴遺跡の象徴性―方法としての景観考古学と象徴考古学―」『先史考古学論集』10　pp. 51-72
安斎正人 2010『日本人とは何か』柏書房
石巻市教育委員会（木暮　亮・西村　力・初鹿野博之ほか）2018『中沢遺跡』石巻市文化財調査報告書 14
石村　智 2008「2　儀礼と政治・権力構造　③威信財交換と儀礼」『弥生時代の考古学』7　pp. 127-139　同成社
（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（村木　敬）2013『下嵐江 I 遺跡・下嵐江 II 遺跡発掘調査報告書 1』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 608
岩永雅彦 1997「多久尖頭器遺跡群の再評価にむけて」『九州旧石器』第 3 号　pp. 113-118
（財）印旛郡市文化財センター（宇田敦司・松田富美子）1997『南羽鳥遺跡群 2』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 133
宇田川洋 1981『河野広道ノート考古編 5 ―金属器・土器・石器―』北海道出版企画センター
江坂輝彌 1963「青森県上北郡野辺地町寺ノ沢遺跡」『日本考古学年報』7　pp. 35-36
江坂輝彌 1983『古代史発掘 2 ―縄文土器と貝塚―』講談社
恵庭市教育委員会（上屋真一・佐藤幾子ほか）2000『カリンバ 2 遺跡第 VI 地点』北海道恵庭市発掘調査報告書
大熊町史編纂委員会（竹島國基・馬目順一ほか）1984『大熊町史第 2 巻』
大館鳳鳴高校社会班 1971『茂屋下岱式土器群（縄文前期）』
大宮市遺跡調査会（田代　治ほか）1986『西大宮バイパス No. 4 遺跡』
岡本健児 1966『高知県の考古学』吉川弘文館
小熊博史ほか 1993「新潟県小瀬が沢洞窟出土遺物の再検討」『環日本海地域の土器出現期の様相』pp. 77-173　雄山閣
帯広市教育委員会（北沢　実）1992『帯広・落合遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第 11 冊
小保方紀久 1982「太田市東別所出土の尖頭器」『太古』第 31 号　東毛考古学サークルはにわの会
麻績村誌編纂会 1989「第二編歴史　第二章原始の麻績　第一節　二つの槍先形尖頭器」『麻績村誌上巻（自然・歴史編）』p. 147-148
香川県教育員会（大山真充・町川義晃・渡部明夫ほか）1980『塩浜遺跡・羽佐島遺跡・花見山遺跡・がんど遺跡・塩浜遺跡 3』
鹿児島県立埋蔵文化財センター（中村耕治・岩屋高広・廣　栄次・松下健生・川元貞久）2005『農業開発総合センター遺跡群 I（窪見ノ上遺跡外）1』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 83
鹿児島県立埋蔵文化財センター（牛ノ濱修・内村光伸・前迫亮一）2007『前原遺跡 20』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 107
樫村友延 2007「福島県いわき市小川町採集両尖匕首一例 」『列島の考古学』2　pp. 125-128　渡辺誠先生古稀記念論文集
柏倉亮吉ほか 1969『山形県史考古資料編』
神奈川県立埋蔵文化財ンセンター（大上周三・鈴木次郎）1984『栗原中丸遺跡』神奈川県立埋蔵文化財ンセンター調査報告 3
神奈川県立埋蔵文化財センター（市川正史・長岡文紀ほか）1992『向原遺跡 II』神奈川県立埋蔵文化財セ

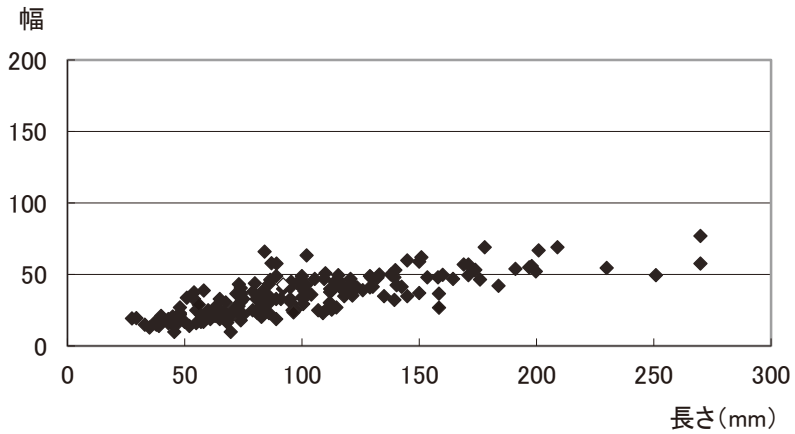
ンター調査報告 25
鹿又喜隆 2008「神子柴・長者久保石器群とその後の時代―人類活動と環境変動との対応関係から―」『第22 回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』pp. 90-107
鹿又喜隆 2009「押出遺跡の石器の機能」『日本考古学協会 2009 年度山形大会研究発表資料集』pp. 263-272
鹿又喜隆 2010「更新世最終末の石器集積遺構に含まれる道具の評価―宮城県野川遺跡の機能研究と複製石器の運搬実験を通して―」『日本考古学』30　pp. 47-63
鹿又喜隆 2013「神子柴・長者久保石器群における石器機能研究―福島県林口遺跡―」『歴史』第 121 輯 pp. 1-14
鹿又喜隆・木暮圭哉 2018「第 7 章　各種分析　第 1 節　中沢遺跡の石器の機能と評価」『中沢遺跡―小寺地区防災集団移転促進事業に係る発掘調査報告書―　第 2 分冊　本文編 2』pp. 86-116　石巻市文化財調査報告書第 14 集　石巻市教育委員会
川井町教育委員会（庄内昭男）1988『大野地遺跡発掘調査報告書』
川上　元・神村　透・森山公一 1976「長野県小県郡和田村唐沢ヘイゴロゴーロの旧石器文化資料」『長野県考古学会誌』26　pp. 1-28
神田孝平 1884『日本石器時代図譜』
神田五六・永峯光一 1958「奥信濃横倉遺跡」『石器時代』5　pp. 48-55
喜入町教育委員会（永野達郎）1999『帖地遺跡　縄文編』喜入町文化財発掘調査報告書 5
木村剛郎 1992「高知県の縄文遺跡とその文化」『第四紀研究』31-5　pp. 399-408
木村英明 1997『シベリアの旧石器文化』北海道大学図書刊行会
木村英明 2012『黒曜石原産地遺跡・「白滝コード」を読み解く―幌加沢遺跡遠間地点の発掘調査と研究―』六一書房
清野謙次 1969「根室国根室市弁天島貝塚」『日本貝塚の研究』岩波書店　p. 520
工藤竹久 1997「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』9　pp. 40-55
栗島義明 1988「神子柴文化をめぐる諸問題―先土器・縄文の画期をめぐる問題（一）―」『研究紀要』（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）4
釧路市埋蔵文化財センター（高橋勇人）2010『東釧路貝塚調査報告書 II』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（小野和之・山口逸弘）1989『房谷戸遺跡 1』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 95
下呂町教育委員会（吉田英敏ほか）2002『大林遺跡試掘調査報告書』
高知県 1968『高知県史考古編』
河野本道 1977『北海道前近代の文化史』北海道出版企画センター
小林達雄編 1983『壬遺跡 1983』国学院大学文学部考古学研究室
子持村教育委員会 1985『黒井峯遺跡 I ―軽石下の古墳時代集落の調査―』
近藤尚義 2000「尖頭器の剥離面に残された「痕跡」について―長野県佐久市下茂内遺跡出土資料から―」『長野県立歴史館研究紀要』6　pp. 13-24
斎藤　隆・麻柄一志 1993「福光町天神遺跡の両尖匕首（両頭尖頭器）」『大境』第 15 号　pp. 21-30
斎藤　岳 2005「三内丸山遺跡の黒曜石について」『特別史跡三内丸山遺跡年報 8』pp. 53-59
蔵王町史編さん委員会 1987『蔵王町史資料編 I』
佐賀県教育庁文化課（西村隆司）1988『長尾開拓遺跡・山王遺跡 8』佐賀県文化財調査報告書 88
佐賀県教育委員会（渋谷　格・徳永貞紹ほか）2011『小ヶ倉遺跡・入道遺跡・九郎遺跡 5』佐賀県文化財調査報告書 186
佐川正敏・鈴木　雅編 2006『蜷田洞窟遺跡西地区出土石器群の研究 I』東北学院大学文学部歴史学科佐川ゼミナール・高畠町教育委員会・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
佐久市教育委員会（須藤隆司）1999『八風山遺跡群　ガラス質黒色安山岩原産地遺跡』佐久市埋蔵文化財

調査報告書 75
佐世保市教育委員会（麻生　優編）1968『岩下洞穴の発掘記録』
佐世保市教育委員会（麻生　優編）1984『泉福寺洞穴の発掘記録』
佐野市教育委員会（出居　博ほか）2004『上林遺跡』佐野市埋蔵文化財調査報告書第 30 集
佐原　真 1994『斧の文化史』東京大学出版会
白石浩之 2001『石槍の研究　旧石器時代から縄文時代初頭器にかけて』未完成考古学叢書 4　ミュゼ
白滝村（千葉英一・畑宏明ほか）1982『服部台 2 遺跡 / 近藤台 1 遺跡』
白石市史編さん委員 1976『白石市史　別巻　考古資料篇』
杉原荘介・戸沢允則・安蒜正雄 1983『佐賀県多久三年山における石器時代の遺跡』明治大学文学部研究報告考古学第 9 冊
杉原敏之 2000「縄文時代草創期の槍先形尖頭器―九州における様相と展開―」『九州旧石器』第 4 号 pp. 289-300
杉村彰一 1967「熊本県鹿本郡鹿北町柿原発見の尖頭器」『考古学集刊』第 3 巻第 3 号（東京考古学会）　p. 94
杉村彰一 1985「柿原遺跡」『肥後考古』第 5 号―特集：熊本の旧石器文化（肥後考古学会）　pp. 71-73
鈴木宏行 2016「古北海道半島における MIS2・3 期の白滝産黒曜石の採取とその変遷」『旧石器研究』12 pp. 23-46
芹澤清八 2008『高原山産黒曜石の分布」『石器文化研究』14　pp. 81-88
芹沢長介・須藤隆編 2003『荒屋遺跡第 2・3 次発掘調査報告書』東北大学大学院文学研究科考古学研究室・川口町教育委員会
仙台市教育委員会（工藤信一郎・吉岡恭平・荒井　格）1996『野川遺跡』仙台市文化財調査報告書 205
大工原豊 2008「儀器化された「石匙・石槍」『考古学ジャーナル』578　pp. 5-9
大工原豊 2012「威信財としての縄文石器―抉入尖頭器・石槍・天神型石匙」『季刊考古学』119　pp. 19-24
高岡町教育委員会（島田正浩）1998『天ケ城跡 1』高岡町埋蔵文化財調査報告書 16
多久市教育員会（西村隆司・松尾吉高）1979『茶園原遺跡』多久市文化財調査報告書第 4 集
多久市教育員会（西村隆司・町田　洋）1980『茶園原遺跡』多久市文化財調査報告書第 5 集
竹岡俊樹 1988「第一章旧石器時代」『香川県史』pp. 71-225
田中英司 1988「小岩井渡場遺跡出土の抉入尖頭器」『考古学雑誌』74-2　pp. 89-96
田中英司 1995「抉入意匠の石器」『物質文化』59　pp. 16-52
谷口康弘 2006「財としての神子柴型石斧」『長野県考古学会誌』118 号　pp. 13-40
玉川文化財研究所（戸田哲也・麻生順司）2003a『神奈川県藤沢市遠藤山崎・遠藤広谷遺跡発掘調査報告書』
玉川文化財研究所（戸田哲也ほか）2003b『神奈川県小田原市羽根尾貝塚』
財団法人千葉県文化財センター（相京邦彦・伊藤智樹・加藤正信・島立桂・田中裕ほか）2003『千葉東南部ニュータウン 26』千葉県文化財センター調査報告 443
千曲川水系古代文化研究所（森嶋　稔ほか）1998『唐沢 B 遺跡』
千代　肇 1991「函館市富岡町遺跡の石器群」『北海道考古学』27　pp. 97-103
つがる市教育委員会（佐野忠史）2010『牛潟（1）遺跡 5』つがる市遺跡調査報告書 4
筑波大学遠間資料研究グループ編（山田昌久・白石典之・加藤真二・加藤博文ほか）1991『湧別川　遠間栄治氏採集幌加沢遺跡遠間地点石器図録』遠軽町先史資料館収蔵資料集
辻田直人 2003「長崎県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器』第 7 号　pp. 17-26
堤　隆 2008「神子柴遺跡における石器の機能推定」『神子柴』pp. 268-289
堤　隆 2018「3 つの両面調整体に刻まれたエピソード－神子柴遺跡における黒曜石製石器のライフヒストリー分析」『資源環境と人類』第 8 号　pp. 1-16
津南町教育委員会（佐藤雅一・佐野勝宏）2002『正面中島遺跡』津南町文化財調査報告 37
津南町教育委員会（佐藤雅一・山本　克）2003『別当遺跡群』津南町文化財調査報告 42
津南町教育委員会（小林達雄・岡本東三・佐藤雅一ほか）2016『本ノ木遺跡　第一次・第二次発掘調査報

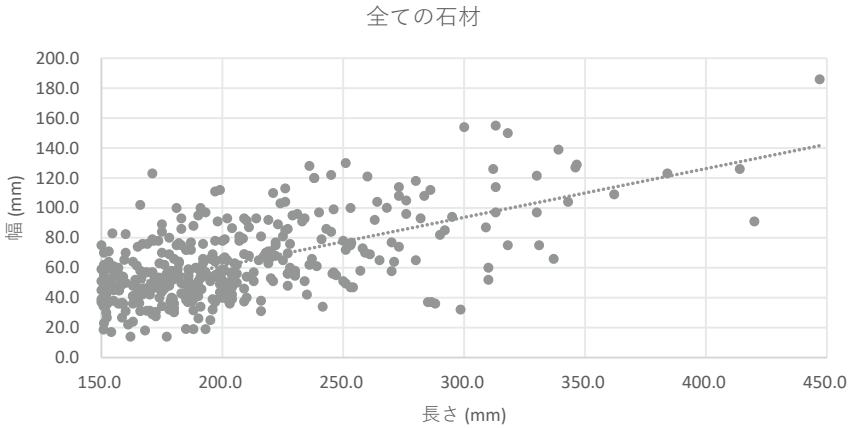
告書』津南町文化財調査報告 70
寺崎康史 1996「北海道地方における大形尖頭器について」『北海道旧石器文化研究』第 1 号　pp. 1-10
東京都埋蔵文化財センター（佐藤宏之）1989『多摩ニュータウン遺跡　昭和 62 年度（第 5 分冊）』東京都埋蔵文化財センター調査報告第 10 集
東京都教育委員会 2002『前田耕地遺跡縄文時代草創期資料集』
遠野市教育委員会（小向裕明・佐藤浩彦）2002『新田 II 遺跡』遠野市埋蔵文化財調査報告書第 13 集
富山県埋蔵文化財センター・婦中町教育委員会（奥村吉信）1986「新町 II 遺跡出土の尖頭器」『新町 II 遺跡の調査』pp. 23-30
都立学校遺跡調査団（ウィルソン・小田静夫・水山昭宏ほか）1998『岡本前耕地遺跡』
直江康雄 2014「北海道における旧石器時代から縄文時代草創期に相当する石器群の年代と編年」『旧石器研究』10　pp. 23-39
長崎県教育委員会（田川　肇・副島和明・伴耕一朗ほか）1988『百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長崎県文化財調査報告書 92
中種子町教育委員会（田平祐一郎・野平裕樹）2004『園田遺跡・大園遺跡』中種子町埋蔵文化財発掘調査報告書 8
財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（近藤尚義・小林秀行ほか）1992『佐久市内その 1：下茂内遺跡 1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 11
長野眞一 2003「鹿児島県における槍先形尖頭器の出現と消滅」『九州旧石器』第 7 号　pp. 69-77
中村五郎 1982「戸ノ口発見の両尖匕首」『猪苗代町史　歴史編』pp. 99-100
中村五郎 1981「両尖匕首」『福島考古』22 号　pp. 0（巻頭）
中村真理 2006「青森県金木町相野山遺跡」『考古学』IV　pp. 127-151
永山倉造 1965「須賀川市関下発見の打製石器についての報告」『福島考古』6 号　p. 38
夏木大吾 2020「枝幸町内採集の旧石器・縄文時代石器」『枝幸研究』11　pp. 13-23
奈良県立橿原考古学研究所（松田真一）2002『桐山和田遺跡』奈良県文化財調査報告書 91
奈良修介・豊島昂 1967『秋田県の考古学』吉川弘文館
新潟県 1983『新潟県史資料編 1 ―原始・古代 1 ―』
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（沢田敦ほか）1996『上ノ平遺跡 C 地点』新潟県埋蔵文化財調査報告書 73
西　幸隆 1970「釧路村達古武湖畔出土の両頭尖頭器」『釧路市立郷土博物館館報』206　pp. 58
西　幸隆 1991「釧路市沖発見の有舌尖頭器」『函館市立博物館紀要』第 16 輯　pp. 21-24
練馬区遺跡調査会（本橋恵美子編）1987『武蔵関遺跡』
能登　健・藤巻幸男 1988「黒井峯遺跡」『群馬県史資料編 1 ―原始・古代 1 ―』群馬県　pp. 516-530
萩野谷悟・橋本勝雄 2015「茨城県常陸大宮市東野の大型石槍」『茨城県考古学協会誌』第 27 号　pp. 145-158
橋詰　潤ほか 2018『更新世末期のアムール川下流域における環境変動と人類行動 vol. 3』明治大学黒耀石研究センター資料・報告集 4
橋本勝雄 2012a「柏市大六天伊勢駅出土石槍の再評価―千葉県における旧石器時代終末期の石槍について―」『かしわの歴史―柏市史研究』創刊号　pp. 217-230
橋本勝雄 2012b「本ノ木型尖頭器総論―槍と植刃器のかかわり―」『研究紀要』9　pp. 1-30　（財）印旛郡市文化財センター
林　茂樹・上伊那考古学会編 2008『神子柴』信毎出版センター
飯能市教育委員会（安岡路洋・猪野幸夫・中島　宏）1977『小岩井渡場遺跡』
東大和市 19977『東大和市史資料編 3　発掘された先人のくらし』p. 108
飛騨考古学会 2001「飛騨の尖頭器集成」『飛騨と考古学』II　pp. 99-104
飛騨考古学会旧石器分科会 2001「飛騨・湯ヶ峰山麓の尖頭器資料」『飛騨と考古学』II　pp. 52-65

平口哲夫 1976「珠洲市域出土の尖頭器」『珠洲市史』1　pp. 467-469
広島県教育委員会（小都　隆・植田千佳穂・梅本健治・桑原隆博・三枝健二ほか）1983『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）』
吹野冨美夫 1995「梨ノ子木久保遺跡出土石器の再検討」『みちのく発掘』菅原文也先生還暦記念論集刊行会　pp. 121-127
福井県教育委員会（松井政信）1980「第 4 章　福井県鳴鹿山鹿遺跡の石器群」『六呂瀬山古墳群』福井県埋蔵文化財調査報告第 4 集　pp. 155-180
福岡市教育委員会（松村道博・加藤良彦・常松幹雄ほか）1996『大原 D 遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書 481
福岡市教育委員会 2004『元岡・桑原遺跡群 3』福岡市埋蔵文化財調査報告書 829（菅波正人ほか）（財）北海道埋蔵文化財センター（長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄・越田雅司）2001『白滝遺跡群 2』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 154
（財）北海道埋蔵文化財センター（遠藤香澄・皆川洋一ほか）2002a『八雲町山崎 5 遺跡』財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書 165
（財）北海道埋蔵文化財センター（長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄）2002b『白滝遺跡群 3』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 169
（財）北海道埋蔵文化財センター（長沼　孝・鈴木宏行・直江康雄）2004a『白滝遺跡群 4』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 195
（財）北海道埋蔵文化財センター（高橋和樹・直江康雄ほか）2004b『白滝遺跡群 5』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 210
（財）北海道埋蔵文化財センター（鈴木宏行・直江康雄）2006『白滝遺跡群 6』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 223
（財）北海道埋蔵文化財センター（直江康雄・鈴木宏行）2007a『白滝遺跡群 7』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 236
（財）北海道埋蔵文化財センター（鈴木宏行・直江康雄）2007b『白滝遺跡群 8』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 250
（財）北海道埋蔵文化財センター（直江康雄）2008『白滝遺跡群 9』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 261
（公財）北海道埋蔵文化財センター（坂本尚史・直江康雄）2015『白滝遺跡群 14（旧白滝 3 遺跡）』（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 311
（公財）北海道埋蔵文化財センタ（中山昭大・鈴木宏行・芝田直人ほか）2016『木古内町大平遺跡 2 遺構編』公益財団法人　北海道埋蔵文化財センター調査報告書 321
（公財）北海道埋蔵文化財センター（中山昭大・鈴木宏行・芝田直人ほか）2017『木古内町大平遺跡 3 盛土遺構・包含層編』（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 328
（公財）北海道埋蔵文化財センター（藤井浩・直江康雄）2018『木古内町釜谷 10 遺跡』（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 344
（公財）北海道埋蔵文化財センター（愛場和人・広田良成）2020『木古内町　札苅 8 遺跡』（公財）北海道埋蔵文化財センター調査報告書 362
松本雄一 2013「神殿における儀礼と廃棄―中央案です形成期の事例から―」『年報人類学研究』第 3 号　pp. 1-41
マリノフスキ B.K.（寺田和夫・増田義郎訳）1967『西太平洋の遠洋航海者』（世界の名著 59 所収）中央公論社
盛岡市教育委員会（平澤祐子・室野秀文）1999『安倍館遺跡　厨川城跡の調査』
森嶋　稔 1976「崖錐状地形と尖頭器」『長野県考古学会誌』26　p. 28
両角守一 1932「信州諏訪郡長地村榎海戸遺跡」『考古学雑誌』第 22 巻第 1 号　pp. 28-48

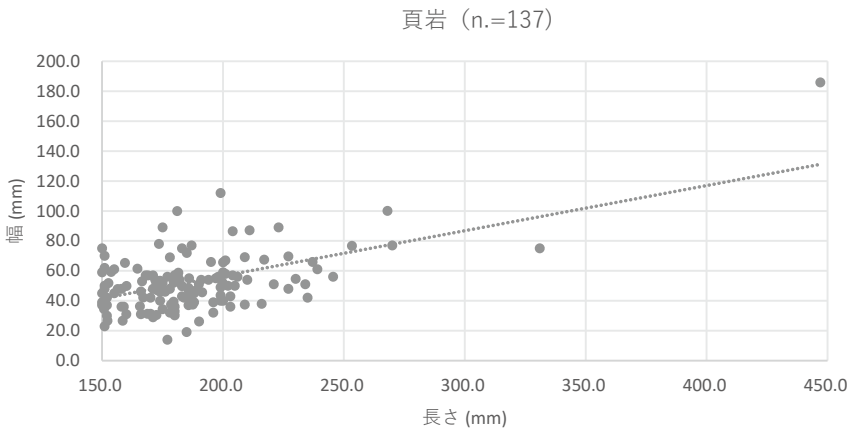
矢板市教育員会（石川　均ほか）2009『高原山黒曜石産地遺跡群剣ケ峯地区遺跡平成 20 年度調査概報』矢板市埋蔵文化財報告書第 10 集
梁川町史編纂委員会 1993『梁川町史　4 自然・考古　資料編 1』
山形県 1982『山形県史第一巻原始・古代・中世編』
山形県教育委員会（加藤稔）1979『弓張平 B 遺跡第 3・4 次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 21
山形県教育委員会（名和達朗）1980『月山沢遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 29
山形県教育委員会（渋谷孝雄・佐藤正俊）1982『墓窪遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 58
山形県教育委員会（渋谷孝雄・黒坂雅人）1988『吹浦遺跡第 3・4 次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 120
山形県教育委員会（佐藤庄一）1990『押出遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書 150
（財）山形県埋蔵文化財センター（伊藤邦弘・渡辺淳一）2006『小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書 147
山原敏朗 1996a「陸別町斗満台地遺跡出土の資料」『北海道旧石器文化研究』第 1 号　pp. 13-24
山原敏朗 1996b「清水町羽帯出土の尖頭器」『北海道旧石器文化研究』第 1 号　pp. 25-27
八幡町教育委員会（佐藤禎宏・大川貴弘）2003『八森遺跡　先史編（別冊先史図録編）』八幡町埋蔵文化財調査報告書 13
湯沢町教育委員会（金子拓男・佐藤雅一ほか）1988『大刈野遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告 9
横田義章 1987「宮崎県東臼杵郡北郷村発見の大型槍先形石器」『九州歴史資料館研究論集』12　pp. 59-64
米倉　薫・阿部祥人編 2002『上野 A 遺跡発掘調査報告書－尖頭器製作址の研究－』慶応義塾大学文学部民族学・考古学研究室
米沢市教育委員会（手塚　孝・菊地政信）1996『一ノ坂』米沢市埋蔵文化財調査報告書第 53 集
和田村教育委員会（川上　元・小林秀夫ほか）1975「男女倉遺跡 B 地点」『男女倉　国道 142 号新和田トンネル有料道路事業地内緊急調査発掘調査報告書』pp. 21-51
藁科哲男 1999「三内丸山遺跡野球場地区及び周辺地区出土の黒曜石製遺物の原産地分析」『特別史跡三内丸山遺跡年報』3　pp. 26-44
藁科哲男 2005「三内丸山遺跡出土の黒曜石製石器，剥片の原材産地分析」『特別史跡三内丸山遺跡年報 8』pp. 13-52
Inada T. 2016　Bifacial Reduction Sequences Observed on the Solutrean Large ‘Laurel Leaves’ from Volgu（Rigny-sur-Arroux, Saône-et-Loire）. *Bulletin de la Société préhistorique française*, 113-3, pp. 475-500
Kilby J.D. 2018　A North American Perspective on the Volgu Biface Cache from Upper Paleolithic France and its relationship to the “Solutrean Hypothesis“ for Clovis Origins. Quaternary International, 515 : pp. 197-207
Morisaki K. et. al 2019　Sedentism, pottery and inland fishing in Late Glacial Japan : a reassessment of the Maedakochi site. Antiquity, 93-372 : pp. 1442-1459
Munro. N.G. 1911　*Prehistoric Japan.*（1971 Johnson Reprint Corperation London/New York）
Stout, Dietrich 2002　Skill and Cognition in Stone Tool Production. *Current Anthropology*, 43-5 ; pp. 693-722
Tavarev A.V. 2019　The Earliest Burial Complexes in the Stone Age of the Russian Far East : Problems of the Identification. *Handbook for the International Seminar in Tohoku University*（*November 2019*）. pp. 1-5
東京大学総合研究博物館・人類先史データベース http://umdb2.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/yawata/result.html

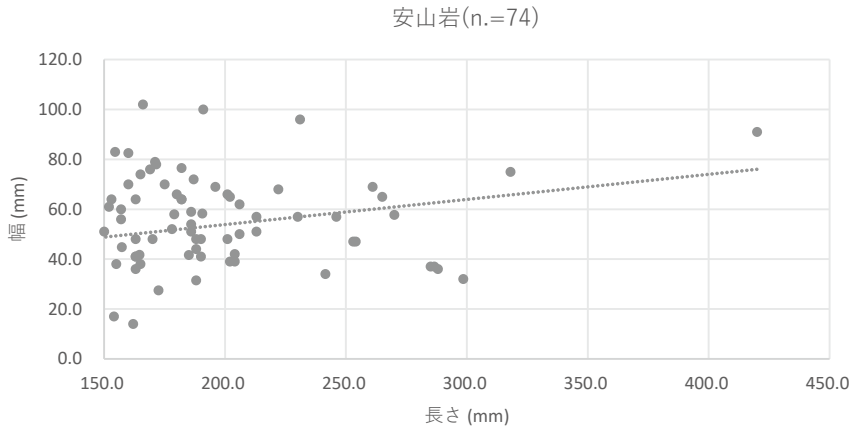


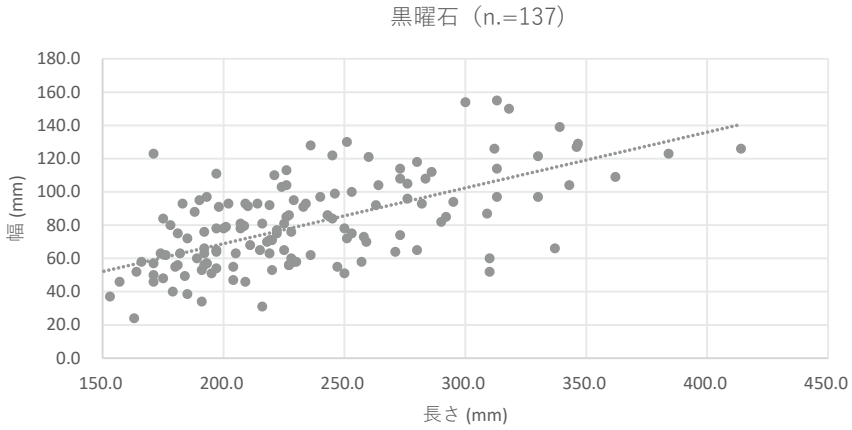
付図 1　神子柴・長者久保石器群の尖頭器サイズ
＊完形のみ，未成品を除く。ほぼ完形のものを含む。n.=180



付図 2　日本列島の大型尖頭器のサイズ
＊未成品・欠損品を含む。n.=375







付図３　石材別の大型尖頭器のサイズ
＊未成品を含む。欠損品を含む

付表１　大型尖頭器の属性

図1遺跡No.	挿図No.	遺跡	所在	遺構	時期	器種	部位	石材	長さ	幅	厚	重	図から計測	文献	図版
1		奥白滝１	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未失敗	黒曜石	174.0	63.0	19.0	177.5		北海道埋文2002b	III-356-52
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	180.0	55.0	16.0	142.4			III-258-2
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	188.0	88.0	31.0	439.4			III-214-32
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	197.0	65.0	17.0	219.8			III-356-53
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	197.0	78.0	17.0	259.9			III-356-54
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	200.0	78.0	27.0	369.7			III-258-3
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	211.0	68.0	24.0	365.9			III-355-49
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	214.0	93.0	22.0	392.1			III-357-55
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	219.0	71.0	19.0	249.7			III-210-11
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	226.0	113.0	53.0	1219.9			III-292-16
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	227.0	56.0	22.0	239.7			III-214-31
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	273.0	74.0	22.0	484.0			III-211-12
1		上白滝２	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未失敗	黒曜石	185.0	72.0	9.0	104.3		北海道埋文2001	III-205-75
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	209.0	93.0	20.0	401.2			III-206-82
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	224.0	103.0	25.0	472.7			III-144-5
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	250.0	51.0	13.0	146.9			III-205-67
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	253.0	75.0	19.0	357.9			III-143-3
1		上白滝５	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形	黒曜石	163.0	24.0	8.0	28.2		北海道埋文2002b	IV-78-1
			北海道			尖頭器	欠損	黒曜石	191.0	34.0	8.0	59.4			IV-78-2
			北海道			尖頭器	欠損未	黒曜石	197.0	111.0	39.0	696.9			IV-80-22
1		上白滝８	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未	黒曜石	181.0	56.0	15.0	120.5		北海道埋文2004a	IV-291-3
			北海道			尖頭器	完形	黒曜石	182.0	63.0	19.0	197.0			IV-210-11
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	192.0	63.0	16.0	157.6			IV-291-4
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	192.0	56.0	19.0	139.6			IV-409-14
			北海道			尖頭器	欠損未失敗	黒曜石	192.0	76.0	24.0	294.3			IV-412-25
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	193.0	57.0	15.0	125.0			IV-210-12
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	197.0	54.0	11.0	99.2			IV-409-13
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	197.0	64.0	14.0	178.9			IV-411-22
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	201.0	79.0	21.0	262.1			IV-293-7
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	207.0	81.0	17.0	174.6			IV-292-5
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	216.0	81.0	28.0	287.8			IV-292-6
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	220.0	53.0	21.0	239.8			IV-210-13
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	226.0	85.0	21.0	351.8			IV-410-17
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	236.0	128.0	43.0	1076.8			IV-419-44
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	240.0	97.0	30.0	495.2			IV-294-9
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	245.0	84.0	24.0	336.9			IV-293-8
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	253.0	100.0	31.0	536.0			IV-295-10
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	260.0	121.0	36.0	805.0			IV-420-48
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	264.0	104.0	30.0	753.2			IV-211-17
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	280.0	118.0	27.0	683.8			IV-296-11
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	300.0	154.0	66.0	2532.5			IV-307-47
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	346.0	127.0	57.0	2249.1			IV-212-18
	2-3		北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	362.0	109.0	36.0	1218.0			IV-297-12
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	193.0	57.0	13.0	111.6		北海道埋文2006	III-223-38
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	195.0	51.0	7.0	63.8			III-223-36
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	215.0	65.0	21.0	235.1			III-224-40
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	219.0	92.0	18.0	359.2			III-225-43
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	221.0	110.0	23.0	521.9			III-225-44
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	251.0	72.0	19.0	235.1			III-223-39
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	259.0	70.0	22.0	318.2			III-224-41
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	273.0	108.0	30.0	699.5			III-226-45
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	276.0	105.0	27.0	610.8			III-372-22
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	282.0	93.0	25.0	619.1			III-222-35
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	295.0	94.0	23.0	542.1			III-227-47
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	343.0	104.0	28.0	700.3			III-228-48
1		旧白滝３	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未失敗	黒曜石	171.0	46.0	15.0	97.6		北海道埋文2005	III-542-8
			北海道			尖頭器	完形	黒曜石	175.0	84.0	16.0	213.7			III-691-9
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	218.0	70.0	16.0	245.7			III-542-7
			北海道			尖頭器	欠損未	黒曜石	263.0	92.0	40.0	617.5			III-152-14

1		旧白滝 5	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	欠損未	黒曜石	198.0	91.0	29.0	534.4		北海道埋文 2008	III-640-3
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	205.0	63.0	18.0	184.2			III-543-12
	2-4		北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	339.0	139.0	72.0	2754.7			III-39-40
1		旧白滝 8	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	ほぼ完形・折損	黒曜石	257.0	58.0	24.0	291.7		北海道埋文 2004b	図 IV-14-1
1		服部台 2	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形失敗	黒曜石	166.0	58.0	16.0	136.7		北海道埋文 2007a	III-92-3
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	176.0	62.0	21.0	210.2			III-29-2
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	219.0	63.0	16.0	187.4			III-216-5
			北海道			尖頭器	完形未失敗	黒曜石	227.0	86.0	24.0	383.2			III-216-6
			北海道			尖頭器	完形失敗	黒曜石	280.0	65.0	19.0	277.2			III-132-7
1		服部台 2	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未	黒曜石	207.0	78.0	27.0		○	白滝村 1982	第 16 図 239
			北海道			尖頭器	完形	黒曜石	208.5	79.5	22.5		○		第 14 図 224
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	210.0	91.5	30.0		○		第 14 図 225
			北海道			尖頭器	欠損未	黒曜石	225.0	81.0	21.0		○		第 16 図 238
			北海道			尖頭器	欠損未	黒曜石	246.0	99.0	24.0		○		第 17 図 242
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	283.5	108.0	21.0		○		第 14 図 228
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	330.0	121.5	22.5		○		第 17 図 243
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	346.5	129.0	57.0		○		第 16 図 240
1	2-5	白滝 18	北海道		後期旧石器～縄文草創期	有舌尖頭器	僅かに先端欠く	黒曜石	313.0	97.0	32.0	649.8		北海道埋文 2007b	IV-18-39
1		幌加沢遠間	北海道		後期旧石器～縄文草創期	有舌尖頭器	ほぼ完形	珪質頁岩	145.0	28.0	10.0			筑波大学遠間資料研究グループ 1991	0240
			北海道			尖頭器	破損	黒曜石	181.0	75.0	22.0				2622
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	183.0	93.0	14.0				0020
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	190.0	95.0	23.0				2652
			北海道			尖頭器	ほぼ完形失敗	黒曜石	192.0	66.0	14.0				0002
			北海道			尖頭器	破損	黒曜石	193.0	97.0	12.0				3141
			北海道			尖頭器	破損	黒曜石	202.0	93.0	19.0				2627
			北海道			尖頭器	基部	黒曜石	204.0	47.0	7.0				0012
			北海道			尖頭器	完形・半月形	黒曜石	204.0	55.0	11.0				図 I-20（0003）
			北海道			尖頭器	完形未（前期か）	黒曜石	220.0	71.0	16.0				0011
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	227.0	56.0	9.0				0015
			北海道			尖頭器	図・写真なし	黒曜石	228.0	76.0	21.0				0001
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	229.0	95.0	23.0				0010
			北海道			尖頭器	破損・図・写真なし	黒曜石	234.0	93.0	12.0				0017
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	243.0	86.0	12.0				0021
			北海道			尖頭器	破損	黒曜石	245.0	122.0	26.0				2603
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	250.0	78.0	17.0				0019
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	271.0	64.0	28.0				0014
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	273.0	114.0	28.0				0022
			北海道			尖頭器	折損	黒曜石	286.0	112.0	51.0				0032
			北海道			尖頭器	完形・折損	黒曜石	290.0	82.0	25.0				0009
	2-6		北海道			尖頭器	欠損完成品	黒曜石	292.0	85.0	15.0				図 I-16（0018）
			北海道			尖頭器	破損	黒曜石	309.0	87.0	24.0				2418
			北海道			尖頭器	3 分，僅かに欠損	黒曜石	310.0	52.0	11.0				図 I-14（0013）
			北海道			尖頭器	ほぼ完形未	黒曜石	310.0	60.0	26.0				0007
			北海道			尖頭器	失敗	黒曜石	313.0	114.0	32.0				0034
			北海道			尖頭器		黒曜石	318.0	150.0	53.0				図 I-12（0321）
			北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	330.0	97.0	37.0				図 I-18（0024）
			北海道			尖頭器	折損・失敗	黒曜石	337.0	66.0	14.0				0016
	2-2		北海道			尖頭器	完形未	黒曜石	384.0	123.0	32.0				図 I-19（0023）
			北海道			尖頭器	完形未・失敗	黒曜石	258.0	73.0	15.0			木村 2012	図 100-1
2		沙留	北海道		採集	尖頭器		黒曜石	189.0	60.0	18.0		○	寺崎 1996	5
	2-1		北海道			尖頭器	完形	黒曜石	414.0	126.0	40.0	2540.0			6
3	3-6	斗満	北海道		採集	尖頭器	完形	頁岩	155.0	45.0	13.0	70.0		明石 1996，山原 1996a	7
			北海道			尖頭器	完形	黒曜石	251.0	130.0	33.0	955.0			2
	2-7		北海道			尖頭器	完形	黒曜石	276.0	96.0	24.0	580.0			4
			北海道			尖頭器	欠損	黒曜石	312.0	126.0	23.0	850.0			3
			北海道			尖頭器	欠損	黒曜石	313.0	155.0	50.0	2060.0			1
4		ワラン沢	北海道		採集	両尖匕首	下部僅かに欠損	黒曜石	222.0	77.0				宇田川 1981	
5		落合	北海道		後期旧石器～縄文草創期	彫刻刀へ再加工	ほぼ完形	黒曜石	184.0	49.4	8.2	87.6		帯広市教委 1992	
			北海道			尖頭器	完形	黒曜石	185.0	38.5	8.5	70.7			
6		羽帯	北海道		採集	尖頭器	先端部	黒曜石	222.0	75.0	22.0	370.0		山原 1996b	
7	2-8	釧路沖合	北海道		採集	尖頭器	完形	黒曜石	191.0	53.0	14.0			西 1991	

8		達古武	北海道		採集	両尖匕首	下部欠損	黒曜石	171.0	57.0	16.0			西 1970，清野 1969	
8		東釧路貝塚	北海道		前期	尖頭器	完形（基部折）	黒曜石	225.0	65.0	16.0			釧路市埋文 2010	第 15 図 1
	2-9		北海道		前期	尖頭器	完形	黒曜石	228.0	60.0	15.0				第 15 図 2
9		枝幸町	北海道		採集	両尖匕首	欠損	黒曜石	175.0	48.0				河野 1977	第 64 図（写真）
9		タチカラウシナイ	北海道		採集	尖頭器	完形	頁岩	148.9	44.2	10.3	61.8		夏木 2020	図 3-4
			北海道			尖頭器	完形未・石斧か	頁岩	268.0	100.1	52.4	950.0			図 5-19
10	2-10	カリンバ 2	北海道	第 257 土壙	前・中期	両尖匕首	完形	黒曜石	236.0	62.0		131.0		恵庭市教委 2000	図 46-1
11		美々 4	北海道	住居 BH-50	前期後葉～後期中葉	尖頭器	中間部片側欠損	黒曜石	157.0	46.0	図から計測	50.0		北海道埋文 1981	図 25-10
11		美沢 1	北海道		前期前葉，中期後葉，後期後葉	尖頭器	完形	黒曜石	145.0	36.0		7.6	○		図 51-15
11		美々 5	北海道	土坑墓 BP-4	前期後葉	尖頭器	完形	黒曜石	153.0	37.0	8.0	60.0		北海道埋文 1980	図 4-118-20
11		美々 7	北海道	住居 XH-25	早期～前期前葉	尖頭器	完形	黒曜石	179.0	40.0	10.0	72.0			図 6-30-30
11	2-11	美々 8	北海道		前期前葉？	尖頭器	完形	黒曜石	216.0	31.0	16.0	130.2		北海道埋文 1984	図 III-91-57
12		美利河 I	北海道		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	ほぼ完形	メノウ	166.7	45.0	20.0		○	北海道埋文 1985	図 IV-62　161
			北海道			尖頭器	完形	安山岩	185.0	41.7	13.3		○		図 IV-62　162
			北海道			尖頭器	完形	硬質頁岩	253.3	76.7	25.0		○		図 IV-64　166
	3-2		北海道			尖頭器	完形	メノウ質硬質頁岩	331.0	75.0	18.0	330.0			図 IV-63　163
	3-1		北海道			尖頭器	完形未	硬質頁岩	447.0	186.0	68.0	4400.0			図 IV-71　201
12		釜谷 10	北海道		後期前葉	尖頭器	完形未	頁岩	206.0	56.0	26.0	280.0		北海道埋文 2018	図 5-18-1
13		山崎 5	北海道	包含層	前期	尖頭器	完形	頁岩	200.0	51.0	25.0	255.9		北海道埋文 2002a	図 V-29-42
14		富岡町遺跡	北海道		前期初頭	尖頭器	完形	硬質頁岩	173.0	47.0	12.0	79.2		千代 1991	第 1 図 6
			北海道			尖頭器・基部平	先端部をわずかに欠損	硬質頁岩	203.0	43.0	19.0	143.2			第 1 図 5
14		中野 B	北海道	包含層	早期中葉	尖頭器	完形	頁岩	186.0	55.0	25.0	215.9		北海道埋文 1996	図 V-42-97
			北海道	包含層		尖頭器	完形	頁岩	188.0	39.0	18.0	123.9			図 V-26-42
			北海道	P-23		尖頭器	完形	頁岩	195.0	66.0	31.0	324.2			図 IV-225-1
15		大平	北海道		前期後半	尖頭器	完形，摘み付き	頁岩	150.0	45.0	14.0	91.2		北海道埋文 2016・2017	図 V-163-113
			北海道			尖頭器	完形未	頁岩	150.8	34.5	13.7	55.3			図 V-172-225
			北海道	H-43 出土		尖頭器	完形未，接合資料あり	頁岩	155.0	61.0	19.0	165.3			図 IV-103
			北海道			尖頭器	完形未	頁岩	175.0	89.0	24.2	338.0			図 V-174―232
			北海道	H-43 出土		尖頭器	バイフェイス完形未	頁岩	181.0	100.0	30.0	568.0			図 IV-104
			北海道			尖頭器	完形未	頁岩	183.0	49.8	22.5	143.0			図 V-175-237
			北海道	剥片集中 FC50		尖頭器	完形，接合し原石に復元	頁岩	237.0	66.0	23.0	338.5			図 IV-26-39
15		札苅 8	北海道	遺構 56	前期後半中心	尖頭器	完形未	頁岩	150.0	75.0	29.0	309.0		北海道埋文 2020	
			北海道	遺構 47		尖頭器	完形未	頁岩	151.0	48.0	18.0	97.1			
			北海道	包含層 14		尖頭器	完形未	頁岩	151.0	70.0	24.0	194.0			
			北海道	遺構 53		尖頭器	完形未	頁岩	183.0	75.0	27.0	332.0			
			北海道	遺構 55		尖頭器	完形未	頁岩	199.0	112.0	52.0	990.0			
	3-8		北海道	遺構 116		尖頭器	完形	頁岩	234.0	51.0	19.0	184.0			
		網岡	北海道		採集	両尖匕首	下部欠損	黒曜石	171.0	123.0			○	国分・岡本 1969	
		日高	北海道		採集	両尖匕首		黒曜石	170.0					神田 1884	
		不明	北海道		採集	両尖匕首	完形	黒曜石	229.0	58.0			○	Munro1911	
		不明	北海道		採集	尖頭器	下部欠損	黒曜石	230.0	58.0				田中 1995	
16		中ノ平	青森	I 文化層	中期～後期前葉	尖頭器	完形	黒曜石（赤石山産）	155.0	33.0			○	青森県教育庁 1975	図版 22
17		沢ノ黒	青森		前期末～中期初頭	尖頭器	完形	珪質頁岩	145.0	74.0	22.0	209.4		青森県埋文 2007	図 175-1
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	204.0	86.5	23.0	370.8			図 175-2
18	3-4	戸鎖	青森		採集	尖頭器	完形	頁岩	270.0	77.0	31.0	544.0		中村 2006	図 12
18	4-6	富ノ沢（3）	青森	3 点が集積	中期中葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	199.0	49.0	24.0	197.3		青森県埋文 1998b	第 30 図 1
19		東道ノ上（3）	青森		前期後葉～中期前葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	174.0	46.0	12.0		○	青森県埋文 2006	図 190-1
			青森	SK17		つまみ付き尖頭器	完形	珪質頁岩	174.0	40.0	12.0		○		図 86-26

20		畑内	青森		前期末主体	異形尖頭器	完形	珪質頁岩	115.0	26.0	12.0	25.9		青森県埋文 1996	図 138-5
			青森			異形尖頭器	完形	珪質頁岩	117.0	27.0	13.0	22.7			図 138-6
			青森	55 号住居		尖頭器	完形	珪質頁岩	140.4	38.0	13.0	72.5		青森県埋文 1999	図 30-125
	4-8		青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	204.9	50.0	14.1	112.7		青森県埋文 2000	図 95-203
21	3-8	寺ノ沢	青森	採集	前期 / 円筒下層	尖頭器	完形	頁岩	221.0	51.0	14.0	170.0		江坂 1963, 安斎 2010	
22		三内丸山	青森	遺構外	中期？	尖頭器	完形	黒曜石（赤井川産）	115.0	33.0	16.0		○	藁科 1999	遺構外-ハク-1298（旧番 80913）
			青森	遺構外		尖頭器	完形	黒曜石（置戸産）	115.0	37.0	9.0		○		遺構外-ハク-1293（旧番 9695）
			青森			つまみ付きナイフ	完形	黒曜石（赤井川産）	136.0	73.0	18.0		○		旧番 80914
			青森			尖頭器	完形	黒曜石（置戸産）	146.0	34.0	12.0		○		旧番 9696
			青森	VIa 層	前期？	尖頭器	完形	珪質頁岩	186.0	43.0	15.0	100.0		青森県教育庁 1998a	39 図 50
			青森	III	中期？	尖頭器	完形	珪質頁岩	178.0	48.0	12.0	92.6		青森県教育庁 2009	130 図 15
	4-7		青森	IIIb 層	前期 / 円筒下層	尖頭器	完形	珪質頁岩	190.0	51.0	15.0	131.8		青森県教育庁 2012	187 図-1
			青森	IIIa-9 層	中期 / 円筒上層 b ～ c	尖頭器	完形	珪質頁岩	171.0	48.0	18.0	126.6			188 図-9
	2-12		青森	666 号竪穴建物	中期	尖頭器	完形	黒曜石（赤石山産）	209.0	46.0	13.0		○	藁科 1999	図 116-4。旧番 32719
22	4-9	新町野	青森	第 554 号土坑	縄文	異形尖頭器	完形	珪質頁岩	172.5	30.5	10.5	57.9		青森市教委 2008	図 239-77
22		石江	青森	土坑 6106	前期中葉～末	異形尖頭器	完形	珪質頁岩	116.4	42.1	13.2	37.9		青森県埋文 2008	図 94-30
			青森	土坑 6095 底面		縦型石匙	完形	珪質頁岩	133.0	52.4	11.4	74.1			図 93-7
			青森	土坑 4025 埋土 1		尖頭器	完形	珪質頁岩	165.6	36.3	18.7	84.3			図 88-18
			青森	土坑 6088 底面		尖頭器	完形	珪質頁岩	172.4	52.0	16.3	123.2			図 91-1
23		津山	青森	第 57 号土坑の開口部の外縁に集積	前期末～中期初頭	尖頭器	完形	珪質頁岩	134.0	61.0	74.0	87.9		青森県埋文 1997	図 113-7
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	135.0	59.0	29.0	72.0			図 110-1
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	136.0	59.8	23.5	74.4			図 110-2
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	136.0	59.8	23.5	113.5			図 113-6
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	142.0	51.0	29.5	71.5			図 111-3
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	142.8	56.8	23.0	68.5			図 112-5
			青森			尖頭器	完形	珪質頁岩	173.5	78.0	30.0	143.7			図 112-4
			青森	包含層	前期末～中期初頭	尖頭器	完形	黒曜石（所山産）	137.0	41.5	14.0	30.6			図 143-28
			青森	67 号土坑	中期初頭	尖頭器	完形	珪質頁岩	138.0	40.0	18.0	26.3			図 117-1
24		牛潟（1）	青森	68 号土坑	前期後葉～中期前葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	150.0	39.0	15.0		○	つがる市教委 2010	37
			青森	92 号土坑		尖頭器	僅かに欠損	玉髄質珪質頁岩	159.0	54.0	18.0		○		41
			青森	65 号土坑		尖頭器	完形	珪質頁岩	168.0	57.0	15.0		○		34
24		相野山	青森		採集	尖頭器	先端部	黄褐色硬質頁岩	187.0	77.0	27.0			中村 2006	2 図
	3-5		青森			尖頭器	完形	黒色硬質頁岩	201.0	67.0	29.0				3 図-2
25		綴子	秋田		採集	尖頭器	完形	灰褐色珪質頁岩	151.0	62.0	17.0			東京大学総合研究博物館 DB	図 16-1
			秋田			尖頭器	完形	灰色珪質頁岩	169.0	57.0	18.0				図 17-2
			秋田			尖頭器	完形	褐色珪質頁岩	171.0	57.0	17.0				図 17-3
			秋田			尖頭器	完形	灰褐色珪質頁岩	191.0	54.0	20.0				図 18-4
	3-10		秋田			尖頭器	接合によりほぼ完形	灰褐色珪質頁岩	197.0	55.0	18.0				図 18-5
26		上ノ山	秋田		前期中葉～後葉	尖頭器	完形	頁岩	170.0	42.0	18.0		○	秋田県埋文 1988	図 164-383
	4-5		秋田			尖頭器	完形	頁岩	196.0	32.0	18.0		○		図 164-382
26		大野地	秋田		前期中葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	175.0	34.3	18.5	97.8		川井町教委 1988	図 112-3
26	4-1	樋向 I	秋田	SXQ19	前期？	両面加工石器	完形未	頁岩	223.0	89.0	45.0	115.7		秋田県埋文 2008	図 15-28
26		茂屋下岱	秋田		前期前半 / 円筒下層 ab	尖頭器	完形未	頁岩	188.0	45.0	15.0	未記載		大館鳳鳴高校社会班 1971	
27		池内	秋田		前期後葉？	尖頭器	完形	頁岩	180.0	57.1	12.9		○	秋田県埋文 1997・1999	第 391 図 11
			秋田	SKS824	前期	尖頭器	完形	頁岩	185.7	48.6	14.3		○		第 125 図-1
	4-4		秋田		前期後葉？	尖頭器	完形	頁岩	191.4	45.7	14.3		○		第 494 図 6
			秋田		前期後葉？	尖頭器	完形未	頁岩	200.0	65.7	24.3		○		第 505 図 7

28	4-3	はりま館	秋田	包含層	前期円筒下層	尖頭器	完形	頁岩	178.5	37.5	12.0		○	秋田県埋文 1990	図 337-S20
29	4-2	心像小学校	秋田		早期？	尖頭器	完形・基部平坦	頁岩	245.5	56.1			○	奈良・豊島 1967	第 36 図
30		岩瀬	秋田	X 層 SXQ60	草創期後半	尖頭器	完形	頁岩	198.0	73.0	21.0	251.7		秋田県埋文 1996	121
			秋田	VI・VII 層 SX67		尖頭器	完形	頁岩	172.0	66.0	21.0	227.3			176
31		中山	秋田		採集	尖頭器	完形	珪質頁岩	162.0	64.0	21.0	187.3		東京大学総合研究博物館 DB	63-31
			秋田			尖頭器	完形	珪質頁岩	168.0	92.0	35.0	412.5			
32		七ツ館	秋田		採集	尖頭器	完形	灰白色珪質頁岩	150.0	59.0	12.0			中村 2006	図 14
		河原崎	秋田		前期	石匙・尖頭器状	先端部欠損	珪質頁岩	159.0	36.0	13.0	56.4		秋田市教委 2009	図 26-13
	3-9	大館市	秋田		採集	尖頭器	ほぼ完形	未記載	220.0	67.0	14.0		○	大熊町史編纂委員会 1984	第 371 図 1
33		安倍館	岩手		早期中葉の土器が多い	尖頭器	完形	頁岩	187.5	37.5	9.0		○	盛岡市教委 1999	第 12 図 1
34		綾織新田 II	岩手	9 号住居	前期中葉 / 大木 2 ～ 4	尖頭器	完形	珪質頁岩	152.0	30.0	13.5	62.0		遠野市教委 2002	図 88-9
			岩手	10 号住居		尖頭器	完形	珪質頁岩	160.0	31.0	11.5	58.0			図 89-2
			岩手	包含層		尖頭器	完形	珪質頁岩	178.0	32.0	15.5	102.0			図 89-1
35		鵜ノ木	岩手		採集	尖頭器	完形	珪質頁岩	239.0	105.0	33.0	675.1		東京大学総合研究博物館 DB	
35		下嵐江 I・II	岩手		神子柴期	尖頭器	完形	頁岩	183.9	42.1	12.9	72.8		岩手県埋文 2013	図 125-312
			岩手			尖頭器	完形	頁岩	158.5	26.7	10.5	36.4			図 125-313
36		新平	岩手		採集	尖頭器	完形	頁岩	158.0	48.0	17.0	83.3		中村 2006	1
			岩手			尖頭器	ほぼ完形	褐色珪質頁岩	178.0	69.0	20.0				図 20
37		八森	山形		神子柴期	尖頭器	完形	珪質頁岩	160.1	49.9	22.1	169.4		八幡町教委 2003	図 30-8
			山形			尖頭器	完形	珪質頁岩	173.5	53.2	21.3	168.7			図 26-3
			山形			尖頭器	ほぼ完形	珪質頁岩	174.0	53.3	23.7	188.0			図 28-4
			山形			尖頭器	完形	珪質頁岩	199.7	52.3	24.2	198.0			図 26-2
			山形			尖頭器	完形	珪質頁岩	209.0	69.1	24.6	286.8			図 28-7
	3-12		山形			尖頭器	完形	珪質頁岩	230.0	54.6	15.1	161.0			図 26-1
38	4-10	吹浦	山形		前期後葉 / 大木 5 ～ 中期初頭	尖頭器	完形	頁岩	199.0	43.6	22.8	164.6		山形県教委 1988	第 126 図 55
39	3-11	上野 A	山形		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形	頁岩	200.0	55.0	21.0	181.7		米倉・阿部編 2002	図 14-3
39		月山沢	山形		神子柴期	尖頭器	先端部欠損	頁岩	175.0	52.0	14.0	120.4		山形県教委 1980	7-17
39		弓張平 B	山形		草創期前半	尖頭器	ほぼ完形	頁岩	150.0	37.0	11.0	63.5		山形県教委 1981	W-3 No.18
40	4-18	坂ノ上	山形		前期中葉	尖頭器	完形	頁岩	151.0	23.0	7.5	34.9		山形県埋文 2006	第 34 図 7
40		大森 A	山形		前期前葉	つまみ付き尖頭器	完形		168.8	31.3			○	柏倉ほか 1969	
41		朝日村石須部	山形		採集	両尖匕首	完形	頁岩	200.0	59.0				江坂 1983	
42		日向洞窟	山形		前期？	両尖匕首	未記載	頁岩	202.0	50.0				田中 1995	
42		日向洞窟西地区	山形		草創期前半	尖頭器	完形	珪質頁岩	167.0	42.2	9.3	56.2		佐川・鈴木編 2006	11960
			山形			尖頭器	完形	珪質頁岩	181.5	58.8	9.4	114.0			1460
42	4-19	押出	山形	ST11	前期中葉 / 大木 4	尖頭器	完形	頁岩	214.3	48.7	14.8	148.4		山形県教委 1990	第 166 図-4 RQ4420
			山形	S-43		尖頭器	完形	頁岩	189.0	37.1	22.7	156.2			第 166 図-1
			山形	ST18		尖頭器	完形	鉄石英	179.0	39.2	20.3	134.9			第 166 図-2
			山形	W-32		尖頭器	完形	鉄石英	186.9	39.6	9.3	81.9			第 166 図-3
43		一ノ坂	山形		前期初頭	両尖匕首	完形未	珪質頁岩	164.6	61.4	33.3	280.0		米沢市教委 1996	第 102 図-2
			山形			両尖匕首	完形	珪質頁岩	166.5	53.0	19.7	169.0			第 101 図-3
			山形			両尖匕首	完形未	珪質頁岩	171.9	54.1	26.6	255.0			第 102 図-1
	4-13		山形			両尖匕首	完形	珪質頁岩	172.4	47.6	15.6	110.0			第 101 図-2
			山形			両尖匕首	完形（折損）	珪質頁岩	179.6	52.1	17.6	120.0			第 101 図-1
			山形			両尖匕首	完形未	珪質頁岩	211.0	87.1	32.0	590.0			第 104 図-1
	4-12		山形			両尖匕首	完形未	珪質頁岩	227.0	69.6	22.3	290.0			第 103 図-1
44	4-11	墓窪	山形		前期前葉 / 大木 1	縦型石匙	完形	頁岩	183.0	43.0	16.0	91.0		山形県教委 1982	第 25 図 29
		南陽市笹子平	山形		採集	両尖匕首	完形	硬質頁岩	192.0	57.0	17.0			田中 1995	
		飯豊町萩生	山形		採集	両尖匕首	ほぼ完形	頁岩	200.0	40.0			○	山形県 1982	
		羽黒町松ガ岡	山形		採集	尖頭器	完形	頁岩	151.0	50.0			○	山形県 1982	図版 187 左
			山形		採集	尖頭器	完形	頁岩	185.7	37.1			○		図版 187 右

45		中沢	宮城		前期前葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	170.0	31.3	12.1	52.3		石巻市教委 2018	図版 182-7（S4）
	4-20		宮城		前期前葉	尖頭器	完形	珪質頁岩	180.0	30.2	12.8	70.5			図版 176-3（S6）
46		野川	宮城	1 号土坑	草創期後半	両面加工石器	完形	珪質頁岩	225.0	101.0	10.6	302.1		仙台市教委 1996	図 15
47	4-21	下別当	宮城		採集	尖頭器	完形	頁岩	235.0	42.0	16.0			蔵王町史編さん委員会 1987	
47		高野	宮城		採集	尖頭器	完形	頁岩	166.0	46.2	12.3		○	白石市史編さん委員 1976	
48	4-22	菖蒲ヶ入	福島		採集	つまみ付き尖頭器	完形	頁岩	209.0	37.5	9.0		○	梁川町史編纂委員会 1993	図 29-3
49	4-14	下ノ平 D	福島	SK104	前期前葉 / 大木 2a 中心？	両尖匕首	完形	頁岩	174.0	53.0	15.0	116.2		福島市振興公社 1995	図 95-62
			福島			尖頭器	完形	頁岩	210.0	54.0	12.0	107.1			850
49		弓手原	福島		前期？	石匙・尖頭器状	完形	頁岩	171.0	29.0	16.0	69.0		福島市振興公社 1995	図 26-13
50		上ノ平	福島		採集	両尖匕首	完形	頁岩	185.0	72.0				福島県 1964	
51	4-15	戸ノ口	福島		採集	両尖匕首	完形	頁岩	217.0	67.5			○	中村 1982	
52		関下	福島		採集	尖頭器	完形	頁岩	210.0	40.0	15.0	未記載		永山 1965	
53		重石平	福島		採集	両尖匕首	完形	頁岩	177.0	56.0	12.0		○	中村 1981	
54		空釜 B	福島	1 号遺物包含層 III 層	前期初頭から後葉	尖頭器	基部を僅かに欠く	珪質頁岩	166.0	27.0	7.0	40.7		福島県文振団 2009	図 27-9
55	4-23	梨木平	福島		採集	つまみ付き尖頭器	完形	頁岩	180.0	33.0	12.0	69.0		大熊町史編纂委員会 1984	第 68 図 1
56	4-16	入ノ内	福島		採集	両尖匕首	完形	頁岩	196.0	38.0			○	樫村 2007	第 371 図 2
		東別所	群馬		採集	尖頭器	完形	頁岩	158.0	36.0	8.0	45.0		小保方 1982	第 4 図
		房谷戸	群馬		神子柴期	尖頭器	未・完形		165.0	74.0				群馬県埋文 1989	No.33
59		黒井峯	群馬	1 号住居	前期前葉 / 関山 II	両尖匕首	完形	珪質頁岩	146.0	31.0	12.0	50.0		田中 1995	
60	4-17	渡場	埼玉	11 号住居址	前期前葉 / 関山 II	両尖匕首	完形	頁岩	204.0	57.0	18.0	131.5		田中 1988，飯能市教委 1977	
61	4-24	梨ノ子木久保	茨城	第 1 土坑	前期中葉 / 浮島式	尖頭器	完形	頁岩	196.0	39.0	未記載	未記載		吹野 1995	第 1 図 2
62		大六天	千葉			尖頭器	先端部を僅かに欠く	黒色頁岩	188.0	19.0	12.0	52.6		橋本 2012a	
		野上経塚	茨城			尖頭器	基部を僅かに欠損	頁岩	152.0	42.0	13.0		○	萩野谷・橋本 2015	第 3 図 1
63	4-25	南羽鳥遺跡群中岫第 1 遺跡 E 地点	千葉	294 号土坑	前期中葉 / 黒浜式	尖頭器	完形	凝灰岩	119.0	32.0	12.5	44.9		印旛郡市文化財センター 1997	第 140-2 図
64		六通神社南	千葉		神子柴期	尖頭器	完形	安山岩	117.0	43.5	3.7	46.6		千葉県埋文 2003	図 44-1
		上ノ台	東京			尖頭器			175.0	44.0				東大和市 1997	
65	3-7	武蔵関（富士見池遺跡群）	東京	第 4 ブロック	神子柴期	尖頭器	欠損，復元すれば 350 mm	珪質頁岩	227.0	48.0	12.1	81.3		練馬区遺跡調査会 1987	
66		前田耕地	東京		草創期前半	尖頭器	完形	チャート	151.0	49.0	26.0	170.0		東京都教委 2002	655
			東京			尖頭器	完形	チャート	151.0	55.0	18.0	135.0			1139
			東京			尖頭器	完形	ホルンフェルス	154.0	49.0	23.0	155.5			520
			東京			尖頭器	完形	ホルンフェルス	155.0	54.0	29.0	210.0			1365
			東京			尖頭器	完形	ホルンフェルス	157.0	36.0	20.0	112.2			784
			東京			尖頭器	完形	凝灰岩	161.0	22.0	10.0	26.6			528
			東京			尖頭器	完形	チャート	168.0	18.0	11.0	31.7			338
	5-14		東京			尖頭器	完形	頁岩	177.0	14.0	7.0	19.9			589
	5-13		東京			尖頭器	完形	チャート	193.0	19.0	10.0	44.6			322
	5-12		東京			尖頭器	完形	ホルンフェルス	195.0	25.0	14.0	64.1			70
67	3-14	遠藤山崎	神奈川		草創期前半	尖頭器	完形	SH	194.0	54.0	20.0	193.0		玉川文研 2003a	1
67	5-11	栗原中丸	神奈川	第 III 文化層	神子柴期	尖頭器	完形	チャート	168.0	46.0	12.0	83.0		神奈川県埋文 1984	第 61 図-1
67		向原　4 次	神奈川		草創期前半	尖頭器	先端部欠損	黒曜石（神津島産）	164.0	53.0	22.0	150.0		神奈川県埋文 1992	第 83 図 1
68	4-26	羽根尾貝塚	神奈川		前期前半	尖頭器 / 局部磨製	完形	硬質頁岩	199.0	40.0	12.0	105.5		玉川文研 2003b	
69	5-10	多摩ニュータウン No.426	東京	第 I 文化層	神子柴期	尖頭器	完形	チャート	237.0	77.0	28.0	400.2		東京都埋文 1989	第 23 図

70	5-1	上ノ平 C	新潟		神子柴期	尖頭器	完形	無斑晶質安山岩	270.0	57.7	11.5	171.8		新潟県埋文 1996	
70		小瀬ヶ沢洞窟	新潟		草創期前半	尖頭器	完形	頁岩	179.5	39.4	14.0	84.1		小熊ほか 1993	
			新潟			尖頭器	完形	頁岩	185.7	47.5	11.6	109.5			
71		大刈野	新潟		神子柴期	尖頭器	未成品欠損	頁岩	163.0	56.0	21.0	173.0		湯沢町教委 1988	Fig. 66-2
	3-13		新潟			尖頭器	完形	頁岩	198.0	56.0	17.0	225.0			Fig. 65-1
		菅谷村	新潟		採集	尖頭器	完形	珪質頁岩	184.0	47.0	16.0	95.8		東京大学総合研究博物館 DB	
		朝日村高根	新潟		採集	両尖匕首	完形	頁岩	176.0	46.0				新潟県 1983	
		福平	新潟		採集	両尖匕首	完形	頁岩	201.0	58.0				新潟県 1983	
72		正面中島　5 集中	新潟		神子柴期	尖頭器	先端部	凝灰岩	145.2	68.0	18.9	110.7		津南町教委 2002	77
72	5-2	別当 A	新潟		草創期	尖頭器	完形，先端部に衝撃剥離	頁岩	190.1	26.2	13.1			津南町教 2003	第 31 図 1
72		向田	新潟	表採	草創期	半月形	完形	頁岩	239.0	61.0	9.0			小林達雄編 1983『壬遺跡 1983』国学院大学文学部考古学研究室	付図 1
72		本ノ木	新潟		草創期	尖頭器	基部欠損	頁岩	152.2	26.6	9.5	44.4		津南町教委 2016	173a
			新潟			尖頭器	完形未折損	頁岩	152.6	51.8	23.0	158.0			184a
			新潟			尖頭器	完形未折損	頁岩	153.7	59.3	25.6	199.3			180b
			新潟			尖頭器	基部欠損未折損	頁岩	156.4	47.9	20.2	148.0			186c
			新潟			尖頭器	完形未折損	頁岩	159.4	65.3	34.0	311.0			181b
			新潟			尖頭器	完形未折損	頁岩	181.3	56.5	27.1	265.5			179a
			新潟			尖頭器	基部欠損	頁岩	184.9	19.1	9.0	29.4			171c
			新潟			尖頭器	完形折損	頁岩	188.8	47.0	20.7	185.5			179 b
72		横倉	長野		草創期前半	尖頭器	完形	玄武岩	152.0	62.0	18.0		○	神田・永峯 1958	第 4 図 1
			長野			尖頭器	完形	玄武岩	158.0	50.0	14.0		○		第 4 図 10
73	5-15	山吹堂	長野		採集	尖頭器	中間部	玻璃質安山岩	241.5	34.0	11.0			麻績村誌編纂会 1989	図 2
74		八風山 IV B 地点	長野		神子柴期	尖頭器	完形未	ガラス質安山岩	157.0	56.0	19.0	280.0		佐久市教委 1999	15
			長野			尖頭器	完形未	ガラス質安山岩	179.0	58.0	14.0	308.0			9
			長野			尖頭器	完形未	ガラス質安山岩	186.0	59.0	15.0	315.0			3
	5-3		長野			尖頭器	完形	ガラス質安山岩	206.0	62.0	17.0	332.0			1
74		下茂内	長野	ブロック 18+20	神子柴期	尖頭器	完形未	安山岩	150.0	51.0	16.0	108.5		長野県埋文 1992	46
			長野	ブロック 18		尖頭器	完形・折損未	安山岩	152.0	61.0	16.0	160.3			49
			長野	ブロック 18+20		尖頭器	完形未	安山岩	157.0	60.0	17.0	152.0			47
			長野	ブロック 18		尖頭器	完形・折損未	安山岩	191.0	100.0	30.0	638.5			33
			長野	ブロック 17+16		尖頭器	完形・折損未	安山岩	196.0	69.0	22.0	293.5			156
75	5-8	男女倉 B 地点	長野		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	未製品完形（先端を僅かに欠く）	黒曜石	178.0	80.0	38.0	400.0	○	和田村教委 1975	50
	5-9		長野			尖頭器	未製品完形	黒曜石	226.0	104.0	54.0	1150.0	○		
75		唐沢ヘイゴロゴーロ	長野		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	未成品完形，図から計測	黒曜石	233.0	91.0	30.0			川上・神村・森山 1976	第 13 図 103
76		榎海戸	長野		採集	両尖匕首	下部をわずかに欠損，完形なら長さ 300 mm ほど	黒曜石	247.0	55.0	11.0			両角 1932	
77		神子柴	長野	なし	神子柴期	尖頭器	完形	玉髄	153.5	48.0	15.0	103.3		林・上伊那考古学会編 2008	図 85-14
			長野			尖頭器	完形	黒曜石	142.5	41.5	15.0	78.7			図 87-22
	5-7		長野			尖頭器	ほぼ完形	下呂石	164.5	47.0	12.0	89.0			図 87-21
	5-6		長野			尖頭器	完形	玉髄	171.0	49.5	15.0	115.0			図 85-15
	5-5		長野			尖頭器	完形	凝灰質頁岩	176.0	46.5	14.5	110.2			図 86-17
	5-4		長野			尖頭器	完形	下呂石	251.0	49.5	13.5	141.7			図 86-18
		唐沢 B	長野	なし	神子柴期	尖頭器	完形	珪質凝灰岩	158.5	36.6	14.3	79.0		千曲川水系古代文化研究所 1998	図 14-1
78		芝原	長野		採集	尖頭器		頁岩	180.0	36.0	19.0		○	森嶋 1976	
79		高山市上野町	岐阜		採集	尖頭器	完形	珪質頁岩	152.0	37.0				飛騨考古学会 2001	
79		西洞	岐阜	ゴルフ場建設時に発見	採集	尖頭器		珪質頁岩（新潟から長野県北部の石材）	146.0	45.0				飛騨考古学会 2001	

79		大林	岐阜		神子柴期	尖頭器	初期工程未製品・完形	下呂石	238.0	120.0	59.0	1305.0		下呂石町教委 2002	15
			岐阜			尖頭器	未	下呂石	153.0	71.0	21.0	206.0			No.3
			岐阜			尖頭器	未	下呂石	167.0	76.0	45.0	490.0			No.77
			岐阜			尖頭器	未	下呂石	183.0	86.0	43.0	664.0			No.10
			岐阜			尖頭器	未	下呂石	193.0	190.0	55.0	1305.0			No.14
			岐阜			尖頭器	未	下呂石	238.0	120.0	59.0	1305.0			No.15
79	5-18	下呂町大原	岐阜		採集	尖頭器	完形	下呂石	140.0	45.0				飛騨考古学会 2001	
80		天神	富山		採集	両尖匕首	完形	黒曜石	171.0	50.0	16.0	106.0		斎藤・麻柄 1993	
81	5-16	鳴鹿山鹿	福井		採集	有舌尖頭器	先端部欠損	流紋岩質岩石	145.0	19.2	5.3	20.0		福井県教委 1980	1
	5-17		福井			有舌尖頭器	ほぼ完形	流紋岩	150.9	18.7	8.3	13.9			4
82		雲津	石川		採集	有舌尖頭器	上下が僅かに欠損	輝石安山岩	202.0	39.0	9.0	74.3		平口 1976	図 1-1
	4-27	井林	石川		採集	尖頭器	完形	玉髄質フリント	200.0	44.0	12.0	113.5		平口 1976	図 1-2
83		羽佐島	香川		早期？	有舌尖頭器	完形	サヌカイト	188.0	31.5	13.5		○	香川県教委 1980	図 13-105
83		国分台第 7 地点	香川		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形	サヌカイト	147.9	52.1	14.6			竹岡 198	図 42-4
			香川			尖頭器	完形	サヌカイト	157.3	44.8	12.5				図 41-2
			香川			尖頭器	完形	サヌカイト	164.6	41.7	14.6				図 40-1
	5-19		香川			尖頭器	完形	サヌカイト	190.6	58.3	15.6		○		図 40-2
84		藤ノ川	高知		採集	両尖匕首	完形，神社の御神宝となっている	粘板岩	241.0	79.0				木村 1992，高知県 1968	第 96 図左
85		根元原	高知		採集	両尖匕首	完形	サヌカイト	180.0	66.0	20.0			岡本 1966，高知県 1968	第 96 図右
87		冠 12T 拡張区第 10 地点	広島		後期旧石器～縄文草創期	尖頭器	完形未	安山岩	154.5	83.0	17.5	208.7		広島県教委 1983	22+23
			広島			尖頭器	完形未	安山岩	182.0	76.5	22.0	271.7			24
88		元岡・桑原第 3 次	福岡	5 層	早期 / 撚糸，条痕，刺突文	尖頭器	完形	安山岩	149.0	20.0	10.0	23.3		福岡市教委 2004	図 48-246
89		山王	佐賀		早期？	圭頭形	先端部・未成品	安山岩	153.0	64.0	17.0	184.0		佐賀県 1988	206
			佐賀			圭頭形	2 つに折損・失敗	安山岩	163.0	48.0	11.0	106.5			挿図 No.234
			佐賀			尖頭器	3 つに折損・失敗	安山岩	165.0	38.0	11.0	80.5			挿図 No.237
89		多久三年山	佐賀			A 類尖頭器		サヌカイト	210.0	53.0	19.0	211.0		杉原・戸沢・安蒜 1983	Fig. 6-1
			佐賀			B 類尖頭器		サヌカイト	220.0	51.0	16.0	190.0			Fig. 8-1
89		多久茶園原	佐賀			尖頭器		サヌカイト	210.0	57.0	16.0		○	杉原・戸沢・安蒜 1983	Fig. 41-1
89		茶園原 IX 地点	佐賀		早期？	圭頭形	完形	安山岩	178.0	52.0	12.0		○	多久市教委 1979・1980	図 20-2
			佐賀			圭頭形	完形	安山岩	188.0	44.0	12.0		○		図 20-1
89	6-7	茶園原 A 地点	佐賀		採集	尖頭器	未製品・完形	安山岩	265.0	65.0	35.0			岩永 1997	
89		茶園原茶園	佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	213.0	51.0	20.0		○	多久市教委 1979・1980	第 10 図-1
89		茶園原西畑第 I 地点	佐賀		早期？	尖頭器	完形未	安山岩	201.0	66.0	21.0		○	多久市教委 1979・1980	第 4 図-2
	6-6		佐賀			尖頭器	完形・最終段階	安山岩	204.0	42.0	20.0		○		第 3 図-2
	6-5		佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	213.0	57.0	18.0		○		第 4 図-1
			佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	246.0	57.0	18.0		○		第 4 図-3
			佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	261.0	69.0	27.0		○		第 3 図-1
	6-4		佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	318.0	75.0	33.0		○		第 4 図-4
89		茶園原西畑第 II 地点	佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	186.0	54.0	23.0		○	多久市教委 1979・1980	第 5 図-2
			佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	204.0	39.0	16.0		○		第 5 図-1

89		長尾開拓	佐賀			尖頭器		安山岩	160.0	70.0	29.0	264.5		佐賀県 1988	10D-15　278
			佐賀			尖頭器		安山岩	160.0	82.5	23.5	240.0			10E-22　287
			佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	163.0	41.0	14.0				挿図 No.79
			佐賀			尖頭器		安山岩	163.0	64.0	31.0	302.8			10D-10　309
			佐賀			尖頭器	未成品	安山岩	166.0	102.0	45.0	741.0			10D-4　316
			佐賀			尖頭器	欠損	安山岩	169.0	76.0	26.0	351.0			10D-5　262
			佐賀			尖頭器	完形	安山岩	170.0	48.0	19.0	239.9			9D-23　14
			佐賀			尖頭器	未成品	安山岩	171.0	79.0	35.0	413.9			10E-21　295
			佐賀			尖頭器		安山岩	171.5	78.0	30.0	374.8			10E-21　296
			佐賀			尖頭器		安山岩	175.0	70.0	26.0	322.0			10D-15　267
			佐賀			尖頭器	完形未	安山岩	182.0	64.0	25.4				挿図 No.80
			佐賀			尖頭器	完形	安山岩	186.0	51.0	30.0	232.5			10D-11　7
			佐賀			尖頭器	折損	安山岩	187.0	72.0	26.0	343.8			10E-16　248
			佐賀			尖頭器	完形 4/5	安山岩	188.0	48.0	16.0	157.5			10E-11　12
			佐賀			尖頭器	完形	安山岩	190.0	48.0	14.0	124.0			10D-20　9
			佐賀			尖頭器	完形・折損	安山岩	201.0	48.0	14.0	130.5			挿図 No.77
			佐賀			尖頭器	完形	安山岩	202.0	65.0	40.0	373.0			10E-17　8
			佐賀			尖頭器	完形 6/7・折損	安山岩	206.0	50.0	18.0	212.5			挿図 No.76
			佐賀			尖頭器	完形 9/10・折損	安山岩	222.0	68.0	28.0	411.8			挿図 No.78
			佐賀			尖頭器	完形 9/10	安山岩	230.0	57.0	27.0	338.5			10D-25　13
90		小ヶ倉　C 区	佐賀		早期前葉	尖頭器	素材面を広く残す未成品，上下両端の一部を欠損	無斑晶質安山岩	231.0	96.0	33.0	710.0		佐賀県教委 2011	図 31-147
90		小ヶ倉　E 区（こかくら）	佐賀		早期前葉	尖頭器	ほぼ完形	無斑晶質安山岩	123.0	16.0	7.0	12.4		佐賀県教委 2011	図 15-40
91		岩下	長崎		早期 / 条痕・押型文	尖頭器		安山岩	115.0	23.3	9.2		○	佐世保市 1968	
92		百花台 D	長崎		早期 / 押型文	尖頭器	完形	玄武岩	152.0	35.0	13.0	66.9		長崎県教委 1988	
93	6-13	柿原	熊本		採集	尖頭器	完形	サヌカイト	253.0	47.0				杉村 1967・1985	1
	6-14		熊本			尖頭器	完形	サヌカイト	254.0	47.0					2
94	6-1	辰之元	宮崎		採集	尖頭器 / 部分研磨	完形	玻璃質安山岩	420.0	91.0	15.0			横田 1987	
95		天ケ城跡	宮崎		早期前葉 / 前平式	尖頭器	完形	サヌカイト	155.0	38.0	9.0	28.4		島田編 1998	図 97-529
96	6-18	吹上小中原	鹿児島		早期前葉 / 前平式	尖頭器	完形	安山岩	154.0	17.0	8.5	43.3		鹿児島県埋文 2005	45
	6-16		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	162.0	14.0	7.4	28.7			44
	6-17		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	172.5	27.5	8.0	37.6			46
96		前原	鹿児島		早期前葉 / 前平式	尖頭器 / 全面研磨	完形	灰青色頁岩	203.0	36.0	12.0	115.0		鹿児島県埋文 2007	2135
97		久保	鹿児島		採集	尖頭器	ほぼ完形	頁岩	166.0	31.0	8.0			鎌田 1997，長野 2003	
97		帖地	鹿児島		早期	尖頭器	完形	玻璃質安山岩	142.0	43.0	10.3			喜入町教委 1999	
98		園田	鹿児島		草創期末～早期？	尖頭器	完形	安山岩	163.0	36.0	9.2	51.0		中種子町教委 2004	石槍 9
	6-12		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	190.0	41.0	13.0	87.0			石槍 6
	6-8		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	285.0	37.0	8.2	97.5			石槍 1
	6-11		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	286.5	37.0	5.7	69.0			石槍 4
	6-9		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	288.0	36.0	6.2	72.5			石槍 2
	6-10		鹿児島			尖頭器	完形	安山岩	298.5	32.0	6.5	74.0			石槍 3